
願い

は一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い

【Nコード】

N4234X

【作者名】

はー

【あらすじ】

現実と虚構を区別するものは何か。真実は世界にとって、彼にとって必要なのか。いくつかの偶然と必然が紡ぐ哀しみの物語。

疑

人は皆、何かに囚われてる。

暗い部屋の中で一人、僕はそう思う。

でも一体、何に囚われていたのだろうか。

心。感情。本能。脳内物質——呟いてみたけれど、言葉は口から零れるだけでぼとりと床へ落ちていった。

瑞々しく弾かれることもなく、痕跡を残さずに消えていった言葉たち。

何だか自分が酷く陳腐に思え、もつとびたりくるものは無いだろうかとあたりを見回し、鏡に映った自分に目を留めた。

落ち窪んだ眼窩に充血した瞳の黒さが、血の気の無い皮膚をより一層際立たせる。

かさつき色素が欠落した世界。

そうか、白——

僕は一瞬の自由を手にし、そして変容する世界に溶け込むように、深い眠りへと落ちていった。

街

梅雨の訪れを知らせる黒南風が、舗装された道路に残る僅かな粉塵を容赦無く巻上げていた。

陽光を遮る陰雲と埃が空を覆い、街から少しずつ光を奪っていく。

そんな街中を一台の古い軽トラックが、あてもなく這いずり彷徨っていた。

使い古されたエンジンの音は暴風に混じり、小さな悲鳴となつて遠くまで運ばれた。やがて細切れにされ、それでもたつぷりと余韻を残しながら、その振動を止める。そして車も動きを止めた。

運転していた狩夜道明はすぐさま周囲を窺い、深いため息をついた。車内に溢れた魂の抜け殻が、古い車体の隙間から街へと滲み出し、緩やかに拡散していく。

人の街。人の居ぬ街。見えぬ街。

突如、大気は急速に動きを萎めた。先ほどまでとはうって変わり、今度は静けさが染みるように広がった。

風が止み、埃塵が静かに街へ堆積していく。惰性も慣性も消えさり、時間すら動きを止めたようだった。

道明はこの街の異質な変化に戸惑い、思わず足にしていたアクセルペダルを強く踏み込んだ。刹那、静寂が支配しかけた街に、耳を劈く甲高い車のエンジン音が鳴轟する。道明は少しだけ安心した。

「なんだよ、停まるのか動くのかどっちだ？」

「すいません。ちょっと足が疲れただけです」

「ふん、もう老化が始まったのか。まったく、最近の若い奴はだしない」

「すみません……」

道明は重いアクセルペダルから足を外した。あらためて道の脇に停車させると、今度はギアシフトをパーキングにいれ、再び重い視線を街へと移した。

ここニューカメリアガーデンエリアは、半年前にオープンした建売住宅の街である。規模は総数百戸と決して巨大ではない。それでも垣根のない開放感あふれるカントリースタイルと、それを支える最新型セキュリティシステムとが話題となり、各メディアで大々的に宣伝された。若々しい木々によってディスプレイされた充分に広い街路や、徹底したバリアフリー。ユーザビリティを強調した明るい街並みは、訪れる人々におおむね良い印象を与えていた。

道明も例外ではなく、この街に来た当初はごく自然に感心していた。

道路に沿って植樹された木々。決して運転手の邪魔はしないが、それでいて上手く自然を主張する配列。ハリウッド映画に出てくるような小奇麗でどこか西海岸を思わせる街並みは、日本においては多少の違和感を与えるはずだが、多くの場合、それは良い方向へと受け取られた。

だが満たされた環境と矛盾した現在の静けさが、街を忌むべき存在へと変えていた。人の居ない街……

いや、この街にも人は居るのだ。居ないはずがない。ただ道明には見えないだけで。

覚悟を決め辺りを見回した道明だったが、ため息を重ねただけだった。

常ならば人が居るという事実を知っているだけに、人が見えないという現実がより道明を憂鬱にしていた。

絶望、もしくは恐怖か——正常な判断が出来ず、答えを捜し求め、道明は空を見上げた。

その視界には静かに蠢く曇天が見えるだけだった。やたらに黒い暗雲は魔物の大きな口のようにであり、体に纏わりついてくる湿った風は、その吐息でしかない。例え頭上の暗雲を越えたとしても、その先にいつもの太陽が控えているなどとは、今の道明には到底思えなかった。確かめる方法はないだろうかとフロントガラス越しに空を見上げていた道明もようやく諦め、視線を大地に戻した。道路の緩やかな起伏が、細かく、細かく蠕動していた。

このポンコツ車め。道明は動悸を押さえ、身も絶え絶えにアイドリングしている車のハンドルを小さく叩いた。振り下ろした右手にある小さな痣がやけに疼く。

「どうした、居たのか？」

「いえ……、何でもありません」

助手席でダッシュボードに足を投げ出し座っていた境生は、フンと小さく鼻を鳴らし道明を睨んだ。

きちんとクリーニングに出された白いYシャツ、紺と赤が斜めにストライプされたネクタイ、髭もそっている道明とは対照的に、境生は薄っぺらの草臥れたベージュのトレンチコート、色あせた黒いデニムを身にまとっている。コートの折り目を手で伸ばしているのか、たんに緊張し、手にかいた汗を拭っているのか、せわしくコートに手を擦り付けている境生を、道明はただぼんやりと見つめ返した。

「なんだよ、気を抜くなよ」

「あ、はい、分かってます」

二人乗りの古い軽トラックが、恨みをぶちまけたように騒々しいエンジン音とはうらはらの、時速十五キロメートルというスピードで、この街を徘徊しだしてから既に一時間が経過していた。蓄積さ

れた疲労が、道明から徐々に冷静さを奪う。焦りが道明を蝕んでいった。

苛立ち

道明は普段から周囲に敏感だった。意識はしていない。偶々、そういった環境下で育ったというだけである。しかし結果として道明は己の危険察知、情報収集能力については少なからず信頼しており、常ならばそれは、体力と引換えに多少の安心感を道明に齎すはずであった。

しかし、この時ばかりは一向に気分が落ち着かずにはいた。必要以上についた神経が、その矛先を道明自身へも向けていた。すべてはこの街のせいだった。

販売開始と同時に応募が殺到していた街。事実、道明が二ヶ月前に通じかかった時は、大層人が居たのを覚えている。

開放的過ぎるスタイルが日本に馴染むのかと懸念した人もいた様だったが、それは杞憂に終わった。

街造りを手がけた会社の社長は、新しい試みと豪快な性格から、ビジネス色の濃いニュース番組でも取り上げられ、成功は当然の事だと豪語した。反感をかいながらも、隙のない街造りが人気を不動のものとし、社長は自信に満ち溢れた顔を惜しみなくマスコミに晒した。評判が評判を生んだ。当選した人々の笑顔と興奮に満ちた顔が全国へ映し出された。

そして矛盾した現在――

全てが道明を苛立たせていた。

「確かに妖怪の出る条件は満たしている……」己の言の葉によって、更に膨らみあがった憂鬱さが、痩せぎすな道明の存在感を狭い空間から一層削り取っていた。

自分がこの空間から消え去る前に、道明は勇気を出し、境生へ提案をした。

「先生、もう、もう帰りましょうよ」

道明の声からはいつもの明るさが剥げ落ち、湿り気のある鈍った声が車内に充満した。

助手席で座席を倒し、長期戦を決めこんでいた境生は「何言ってるんだ」と呆れながら道明を見た。境生にとって現在という時間は、昂揚と弛緩とが混在した、彼にとっては珍しく充足した時間だった。だから帰る気などはさらさら無く、ただ面倒そうに道明に言った。
「ここに来てまだちょっとしか経ってないだが。良いから、ほれっ、教えた通りに言えっ」
「でも……」

絶望に打ちひしがれている道明とは逆に、期待に満ちた表情で周囲を窺っていた狐蔵境生は、助手である道明からのシンパシイが得られていない事実に対し、改めて苛立ち、声を荒げた。

「いいから、早く、言え！」

「そ、そんな」

生来、予測と素早い察知によってリスクを徹底的に排除し、消去法によって残された道だけを進んできた道明だったが、必ずしも選択が苦手というわけではない。可能な限り選択の余地を減らす努力、つまりは正確な情報摂取と状況判断を忘れないよう心がけているだけだ。しかし、全ての物事に対して確実性を持った筋道が見えるわけでないし、回避が間に合わない事だってある。そのような事は今までに幾度も経験してきたし、今もそうだ。この場所に来て以来、生きた心地のしなかった道明もようやく覚悟を決めた。

自らに見い出した小さな勇気、あるいは蛮勇の灯火か。それらが、

絶望と屈辱によって塗りつぶされぬよう必死に、道明は必死に声を搾り出した。

「よ、妖怪、妖怪退治は如何ですか……。ご家庭内における各種トラブルの原因は全て妖怪の仕業です……。ええと……。当方が退治致しますのでご遠慮なくお申し付けください。な、なんと今なら半額キャンペーン実施中……。す……す……」

白い軽トラックに搭載されている、スピーカーというフィルタを通した道明の声は、その憔悴をいささかも遮られる事なく、やがて街に吸い込まれていった。微かに残る余韻が道明に一層の恥辱を掻き立てる。

「うーむ、おかしい。五割引なのに誰も寄って来ないとは……。五割引きだぞ、半額だぞ、ありえないだろこのお得っぷりはっ」

境生は右肘をさすりながら、何度も信じられないとつぶやいた。

「先生、もう勘弁してくださいよ！　これ、絶対避けられてますって。普段はここ、結構人通りあるんですから」

「はあ？」

「てか、妖怪なんて言ったら普通の人は怪しんで近づきませんって！」

「ばっきやろう、追い詰められた人はこう、なんか感じるものなんだよ！」もし、そんなふうに困った人が居たら、助けてえじゃねえか、力になりてえじゃねえか……。と言うのが境生の主張であったが道明にとってそれは単なる言い訳にしか聞こえない。だから道明は賭けた。帰ろうと、僕を救ってくれと——しかし、その望みは叶う事はなかった。

探偵

道明が境生の日本一妖怪退治事務所で助手として働き出してから、今日で既に二週間が経過していた。今のところ、道明が仕事に、境生に慣れる気配は、無い。

日本一妖怪退治事務所がある周辺は細々としたビルが、まるで計画性を感じさせない配置でひしめくように建ち並んでいた。それらは、躰を忘れられた子供が積み木箱をひっくり返し、片付ける事をせずにただ部屋の片隅に押しやった状況にとてもよく似ていた。その中で、最も運の悪かった積み木が日本一妖怪退治事務所のある共栄ビルである。

共栄ビルは三階建てであったが、目の前の細い道路を除く周囲全てを、共栄ビルよりもずいぶん高いビルに囲まれており、従ってプライバシーと日光は望むべくもなかった。隣接したビルとの隙間が、階が上がるにつれ狭くなってゆくのは、三方向を囲むビルが共栄ビルに向けて傾いているのか、それとも共栄ビルが上階にいくに従い広がっているのか、それは境生にも分からなかった。しかし、「このビルには何か惹き付ける力がある！」と彼は思ったし、その事に非常に満足していた。勿論それはビルと言う建造物にとつてはありがたくない話である。しかし真実がどうであれ、共栄ビルが悪い噂までも引きつけてしまっていたのも事実で、過去に建築物調査団体が三ヶ月に及ぶ調査を行っていたところ、調査団全員が原因不明の眩暈に襲われたりだとか、ある時は共栄ビルだけが揺れていてそれを見た人は、まるでビルが蠢いているとしか思えなかったとか、年に数回共栄ビルには誰も入ることの出来ない幻の四階が現れるなどといった類の噂までいれるとキリが無く、今では立派な『いわく』つき物件と化していた。

とはいえ、都心から程近く、立地としては決して悪くなかった。

『いわく』はむしろ都合が良かったと、その事をネタに大家と直接家賃交渉した境生は、自分の着眼点の良さ、つまり家賃の安さを良く道明に自慢していた。確かに事務所として共栄ビル三階ワンフロア全てを貸しきるために、境生が大家に対し払っている対価は、道明にはにわかには信じられない程に安かった。しかも共栄ビルの一階と二階は現在借り手がおらず、必要であれば借り手が現れるまで自由に使って良いとまで言われている。家賃月額十万円という事実は、悪い噂などの類が嫌いな道明が、事務所移転を境生に訴える事を諦めさせる程に安く、だからせめてそういう噂が立ち難く、また消え去りやすくするために道明は、ビル周辺を掃除して綺麗にしたりだとか、綺麗な花を植えたプランターを周辺に配置してみたりだとかを試みたのだが、効果は全く無さそうで、未だにビルに入っていく道明の姿を見る周囲の眼には深い拒絶が宿っていた。このビルには雨が良く似合う、いつしか道明自身もそう思うようになっていた。

そもそも道明が境生の元で働いているのは、彼自身の意思ではなく、彼の父親の意向が大きく関係していた。道明の希望を叶えうる勤め先を父親が見つけ出し、半ば強制的に道明を送り出したのである。職業についてさほどの関心を抱かず、また知識もないままに育った道明は、この事についてそれなりに納得はしていたものの、やはり完全に自分の意思で決めたとは良い難く、そして、その事が道明を余計に辛くさせた。道明は威厳もあり村の長でもある父親の事を尊敬し信頼もしていたが、それも今や危うい。

「先生は、父とどういう知り合いだったんですか」

街に来てからの重い雰囲気から逃れるように、道明は思いついた疑問をそのまま口に出した。

「ん、いや、全然知らなかったよ。おまえの事を頼みに来た日が初

対面」

「父が？ いきなり？」

「おう、いきなりうちの息子を鍛えてくれって頼みこまれてな。ま、俺様クラスになると、他人の助けなんてこれっぽっちも必要無いが、助手の一人もいないと格好がつかないってところもあるからな」

「ああ、確かに先生クラスなら助手なんて足手まといですよな」

どうせ仕事も無いし給料的に、と続けそうになり道明は慌てて口を噤む。しかし父が言ったとはいえ、境生に助手など本当に必要なのだろうか。道明は父の判断に疑問を感じていた。本当に助手なのか、それとも……

「それとも監視する必要が……」

「ん、何だ？」

「あ、いえ、何でもありません」

慌てる道明をよそに、境生は視線を空に向けた。

「ふん、お前は幸せ者なんだぜ」

「ですね。月に三百時間も先生と一緒に行動できる上に」

「そうそう」

「お給料まで貰えるなんて」

「うむ」

「月給五万円だからって文句なんて全く言えない」

「そうだ、その通り！」

「訴えるなんてもつての他ですね」

「……え」

「あ、いえ、何でもありません」

「だ、だよな」

「でもね先生、今時妖怪退治なんて絶対、絶対流行りませんってば。妖怪なんて居ないんですから。いや、現代では意識すらしてもらえない。その、折角の先生の、あ、溢れる才能が勿体無いですよ！」

道明は他者へ物事を伝える際に発生する責任を充分に理解していた。例えばそれが常識であったとしても、自ら観察、あるいは確認した事象でない限り、出来るだけ断定する事は避けていた。だが、そんな彼も、相手が境生である場合に限り、断定する事が相応しくない事項に関しても躊躇無く断定する事が出来たし、思ってもいない事を言う事だって出来た。この時、道明の心が痛んだのは、境生に對し嘘をついたからではなく、嘘をつかざるを得ない環境下にある己が可哀相だと思ったからである。

「まあ、確かにな」

遠くを見つめる瞳の奥に、微かな悲しみをたたえながら、狭い車内で境生は呟いた。時代は変わったのか……

「うん、やはり今のトレンドは占い師だな。あんた死ぬわよっ、てか。道明、ちよつとやってみろ」

道明は深い失望に襲われはしたものの、境生の事務所に勤め出して過ごした二週間が、彼の中に多少の免疫を作っていたようで、何とか冷静に言葉を返す事に成功した。

「先生、もうそれ、ちよつと古いですよ。しかも占い師が軽トラで街中を宣伝してまわってるところなんて、僕は見た事ありませんし」

「そうか。そうなると後は、そうだな、教祖様のなやつかな」

「だから！　トラブルを解決したいだけなら、普通に探偵で良いじゃないですか」

「――探偵だけはダメだ！　探偵だけは……」

境生が苦悶の表情を浮かべた丁度その時、二人の後方すぐ傍で一台の黒い大型車が、静かに動きを止めた。

ようやくその車に気付いた道明と境生が振り返ると、既に機敏な運転手によって後部座席のドアが開かれているところだった。

道明がこれほど近くの車の気配に気付かなかったのは、境生と言
い争いをしていたからというだけではなく、あまりにも高級な、音
に関する技術の粋を集めたその車の性能によるところが大きい。
境生の生涯収入を全部足しても買えるかどうか分からないであろう
その高級車のドアには、惜しげもなく『菱川探偵事務所』と、これ
また高級そうな、金箔で処理された文字列が並んでいた。

センスは悪いのかもしれない。そう思った道明だったが、颯爽と
その車から降りてきた人物には確かに車の価格に見合うだけの風格
が備わっているように感じた。

選ばれた男

菱川栄都――

財閥解体指令を逃れた財閥にして日本最大、都内に広大な敷地を有する本社を悠然と構えている現ゴールド・デイ・カンパニーの会長、菱川延幸の八番目の子供であり、末息子でもある。働かずとも一生楽して暮らせるだけの財力を持ちながら、常にグループの成長を強いられてきた兄達とは違い、栄都は道楽に生きる事を許された只一人の子供。菱川延幸が自分の趣味に興味がない以上、栄都は日本で最も好きな事にお金をかけられる男、と言っても過言では無い。そして彼は何故か探偵をやっており、その能力は類を見ない。と、これが道明がマスコミを通して得ていた菱川栄都に対する情報である。

車から降りた栄都は境生を一瞥するなり、うんざりとした顔つきで、至極正確な挨拶をした。

「やあ、久しぶりだね、境生くん。その様子だと相変わらず世間の人々に迷惑をかけ続けている様だね」

「ああ？ 何だと、この野郎！」

「おや、てつきり餓死寸前かと思ったが、フム、やはり君はゴキブリ並の生命力をもってるようだね」

この事は道明にとっても確かに不思議であつた。道明はこれまで境生がまともに食事しているのを見た事がない。この二週間、道明は自分で買った昼御飯を、物欲しそうに見つめる境生に奪われる危険を感じながら、急いで食べるという状況にある。おそらく本当にお金を持ってないのだと思ったのだが、その考えに反し、境生は特にやつれる事なく、健康そうな肉体を充分に維持していた。本当に境生にはゴキブリ並の生命力がある、と常々思っていた道明は、だ

から栄都の意外そうな顔にも納得したのである。

「うるせー、大体なんでお前がこんなところに居るんだよ。さつさと家に帰って一葉さん相手に探偵ごっこでもしてろ！」

「何を言っているか分からないが、それは無理な相談だ。我家では一葉さんなんて人を雇っていないのでね。それにここには仕事で来たのであって、君達のように恥かし気も無く、迷惑を垂れ流す輩とは違うのだよ」

「は、お前に依頼するとはなんとも可哀相な依頼者だ。わざわざ金を出してまで不幸を買うなんてな」

「相変わらず失礼な奴だ。まだ君は探偵と言う仕事を理解していないようだね。よろしい、ついて来たまえ」

「ああっ、なんで俺がお前についていけなくちゃいけないんだよ」

「フン、依頼者に引き合わせてやろうと言っただよ。無論、僕より先に問題を解決すれば報酬は君のものだ」

え？——道明は二人が知り合った理由や何故仲が悪いのか気になっていたが、今はそれ以上に久々に仕事にありつけるかもしれないという強い期待感が心の大部分を占めていた。しかも、菱川探偵事務所の依頼料は他とは比べ物にならないくらい高額だ、と聞き及んだ事がある道明である。

境生は仕事を得る為に、故意に栄都に対し悪口を言っているのかも知れない。もしそうであるならば、境生の事を多少見直す必要があると思う。そう思った道明とは別に、境生は未だに辛らつな表情を崩さないでいた。

「ほら、早速不幸の第一段階だ。守秘義務も糞もあつたもんじゃねえ」

「それは心配しなくても良い。何故なら僕が君より先に解決したら、君には僕の部下になつてもらう。同じ会社の人間なら問題あるまい。

丁度、使い走り係がいなくなつてねえ。ああ、心配はいらない。猿でも出来るような仕事だけを、この僕がちゃんと選んであげるから」
「オレが先に解決する可能性だつてあるだろうが」
「ははは、何の冗談だい、それは」

道明はようやく、先ほどから境生が浮かない顔をしていた原因、あるいはその一端を理解した。たしかに無条件で仕事を紹介してもらえるのであれば、恥をかいてまで依頼人を探していた道明達にとつて、これほど美味しい話はない。だが、美味しい話には相応のリスクがあり、その事で始めてバランスが取れているという大原則を、その時、道明は迂闊にも忘れていたのだった。

「あ、あの、その際僕は……」

「ん、君は誰だい」

「こいつはオレの助手だよ。どうしてもやりたいつていうから雇つてやったんだ」

「はじめまして、狩夜道明といいます」

「君、本気かい？」

「えと、あ、はい、いちおう」

「どうだ、うらやましいだろう」

自慢げに胸を張る境生を無視して、栄都は道明をさつと見た。

「見た目は多少はまとものようなだが、自分で選んだ道だ。責任も自分で取るんだね。ああ、心配しなくて良い。丁度、トイレ掃除係も不足していた所だから」

この瞬間、栄都とつて道明は境生側の人間でしかなく、その事に気付かされた道明は、天井から吊っていた糸が切れた人形のようにガクリと肩を落した。

「さ、どうするんだい、境正くん。無論、自信が無いのなら止めてもらつても構わない」

道明は境生が当然断るものと思っていた。相手は日本一有名かつ

有能な探偵と言われる菱川栄都である。豊富な財力を使え、世間の信用もあり、その上、好きな事を許された栄都がわざわざ選んだ職業なのだから、世間の評判もあながち的外れではないはずだ。なにより、境生を蔑みつつも嫌らしさを感じさせず、むしろどこか穏やかで涼しげな虹彩を有した栄都の瞳が、彼自身の能力の高さと、それに付随する自信を示しているように、道明は感じていたのである。

「ちつ、しょうがねえやってやるよ。けど言つとくが、報酬の為にやねえ。これ以上不幸な人を増やさない為だ。勘違いするなよ」

「フフ、僕もその意見には同感だ。ようやくこの街に寄生する害虫を駆除出来ると思うと、とても嬉しいよ。放っておくと中々死にそうにないからね」

「言ってる」

「フン、大体あの時だつて君が邪魔をしなれば――」

「けっ、大体あの時お前が邪魔をしなければ今頃――」

二人の言い争いの最中、道明は境生の導き出した結論に納得がいかない様子で、ただ茫然としていた。結局、道明はそれから約一分間ほど二人に対し「僕は無関係である、二人で勝負して欲しい」と主張したが、元々彼の意見を聞く気配が無い風の二人には、受け入れてもらう事が出来なかった。せめてあと一分間だけでも時間を貰えれば……あまりにも理不尽な条件を論拠とし、二人に条件の改善を了承させる自信があった道明だけに、残念な結果に終わった事がとても悔やまれたし、人の話を聞こうともしない二人を途轍もなく恨んだ。

「さあ、それでは諸君、依頼者宅に向かおうか。心配せずともそちらの車が付いて来られるようなスピードしか出さないよ」

そう言つと栄都は素早く、そして優雅に車に乗りこんだ。その動きは男性である道明にとつても美しいと思える所作だった。

「この車だつて全開すりゃあ四十キロくらい出せるっつーの」
境生は下り坂で最高時速三十キロメートルをたたき出した事がある
軽トラックに乱暴に乗り込み、荒々しくドアを閉めた。

理由

探偵を嫌がるのも無理は無い。道明は憤然たる様子の境生を目を遣った。レベルが違う。しかもよりにもよってこんなに近くで働いているだなんて――栄都のバックグラウンドではなく、会った瞬間に感じ、乗車する際にみせた栄都自身の身体能力に驚きを隠せずにした。目的を達成する為の能力が栄都と境生では比べ物にならない。幼い頃から日本武道を修練していた道明にとって、栄都が見せた動きは驚嘆にあたいするものだった。ぶれない体幹と流れるような手足が、まるで舞をまっているかのようだった。単に鍛えているのではない、実践的な動きをしている。道明にはそれが分かった。

移り行く街並みと、とうに限界を超えた軽トラックの金切り声を聞きながら、ただ黙ってシートに身を委ねていた境生だったが、どこまでいっても変わり映えのしない風景に飽きたのか、呟く様に栄都について語り出した。

「あいつ、成功と富の象徴である一葉さんを知らなかったな。あれか、カードと言う奴か。ったく、やな野郎だぜ」

「先生、諭吉さんって知ってますか？」

「ああ、誰だ、それ」

「あ、いや、知らないのならいいんです、はい」

疑問を抱えた者にとつて、回答というものが必ずしも歓迎されるとは限らない。道明は小さな欲求が満たされ、大きな失望を得た。

「あの、あ、いや、やっぱり何でもないです」

「何だよ、気持ち悪いから言えよ」

「……先生はですね、その、本当に栄都さんに勝つつもりなんですか？　というか、勝つ見込みはあるのですか」

「何言ってるんだ、やる以上は勝つ、それ以外に何があろう！　それ

にさ、お前にももうちよつと給料払わないといけないからな」

「先生……」

境生がわざと勝負に負けて菱川グループの一員になろうと企んでいるのでは、と疑っていた道明にとつて、希望とはいかないまでも、負けた時に納得できるだけの理由が少しは見つかったように感じられた。

「ま、とりあえず適当にサボって給料貰ったら速攻辞めれば良いんだよ。要するに、既にして俺の勝ちって事だ。探偵なんてやりたくないしな」

「……………」

「ほら、探偵って証拠とか探して原因を突き止めなきゃいけない訳で、そんなのってさ、はつきり言ってメンドイじゃん？ だから妖怪退治とかいって誤魔化そうと思ってたわけ。だって妖怪退治なら原因を全て妖怪のせいにするだけだし。なんていうかおれってあつたまいいー、みたいなあ。あ、いや、差別化って大事だと思うんだよね。まあ確かに今のところ、思いつき収入には差別化ついてるけど、これって一時的な要因の一つであつて、相対的に見れば将来的にはこつちの方が……それに、それにっ——」

「……………」

ある種の境界線に立たされた道明だったが、境生の負けを前提とした正確な分析力を、なんとか無理やり評価する事で、一応のところで踏み留まっていたし、境生の人間性について、再度、認識の下方修正する冷静さも失わずにいた。

なにより道明は完全に絶望していたわけではなく、つまり、僅かながらの希望を抱いていたのである。

境生にも起因せず、栄都にも起因せず——道明只一人において完結し、故に道明が持てる唯一の希望——それはそういった類のものであり、道明の根源的な存在理由、つまり狐蔵境生の元で嫌々なが

らも助手をしている理由、それこそが道明に残された最後の希望であり、道明の父によって紡がれた境生と道明を結ぶ唯一の運命系でもあった。

道明は知っていた。己のなすべき事を――

道明は気付いていた。この街が普通でない事を――

こうなったら運を天に任せるしかないか、そう覚悟を決める道明を余所に、依頼者宅に到着するまで境生は一人、延々と狭い車内で道明にとってはノイズでしかない、あるいは呪詛のようなものを垂れ流し続けていた。

出会い

静寂に思いを馳せた昼下がり、道明達の乗る軽トラックの速度に合わせたのか、いやにゆっくりとした速度で、ようやく一向は街の中心にある一戸建て住宅に到着した。

周囲の家との柵も無ければ塀も無い、開放感溢れるその家は、白を基調とした瀟洒なデザインで、角張った造りが家と言うよりも巨大なブロックかあるいは豆腐を連想させる。当戸建住宅区画を企画販売したディベロッパー企業、安友建設の元社長、故、安友弘哉が自宅用として建てた家であり、彼の持論『防犯は地域全体で』を色濃く反映しているともいえる。

およそ一年前に、四十台という働き盛りにしてこの世を去った安友弘哉は、生前、栄都の兄である菱川頼一と家族ぐるみで懇意にしており、だからというわけではないが安友弘哉が亡き後も、社として菱川グループとの付き合いは続いていた。栄都自身は安友弘哉やその家族と親密な関係にあつたわけではないが、一応の面識だけはあった。その関係から今回の依頼が廻ってきたそうだが、その経緯について栄都はそれ以上、道明に詳しく話すことはしなかった。

「ここか。たんまり金もつてそうだな……」

栄都から簡単な経緯の説明が終わるとすぐに境生は家の値踏みを始めた。といっても境生の持っている知識では、これが精一杯の査定だったので、これ以上言葉は続く事はなかった。

「まったく、君は全ての発想が下品で困る」

「うるせー、っか、報酬は幾らなんだよ」

「フン、案件の詳細内容については僕もまだ聞いてないが、何でも先方は報酬として五百万くらい出すと言っているようだ。まあ僕にとって金額など、そうだね、依頼者が僕の仕事の邪魔しないかどうかどう

かを判断する尺度、程度の意味しかないがね」

「ご、五百？」

「ん、不満かい。まあ確かに多少安くはあるが、兄と付き合いがある企業の様でね。サービスしてあげたのさ」

「お、おい、道明。五百万って一葉さん何人だ」

「千人ですね。というか、諭吉さん五百人の方が分かり易くないですか」

「……」

「ちよつ、その何言っただこいつ、みたいな顔は止めてくださいよ。まったく……」

玄関に到着すると栄都はインターホンを押そうとした指を止め、振り返り、二人に言った。

「ああ君達、くれぐれも粗相の無いようにしてくれたまえ。兄の顔を汚すのは一向に構わないが、僕のプライドを汚す事だけは許さないから、それだけは覚えておいてくれたまえ」

「心配するな、お前のプライドなんてこれ以上汚れようが無いから」

「なんだと」

「なんだよ」

「ちよつと、二人とも。ここでケンカなんて止めてくださいよ。あ、ほら、誰か来られたようですよ」

玄関の奥で人の発する音を聞いた道明が、二人を仲裁しつつ、素早く話題を変えた。その音は道明達から扉一枚を隔てたすぐ傍で止まり、やがてその扉が静かに動き出した。重厚そうに見えた扉の、慎ましく、音を出す事は罪だと言わんばかりの滑るような動きに、改めて建物全体のクオリティの高さを道明は感じる。

「フン、命拾いしたな」

「そりゃあ、こっちの台詞だっつーの」

再びいがみ合いを始めた二人を余所に、道明は扉から身を出しか

けている人物に、正確には女性と思わしき人の腕に挨拶をした。

「あ、あの、この度はご依頼ありがとうございます。いや、厳密に言うとなら私の依頼ではないのですが」

曖昧に挨拶を終わらせた道明は、ようやく扉から全身を覗かせた女性の顔を伺うように視線を上げた。

三十半ば。想像より若い。ロングヘアが良く似合っているし、落ちついた雰囲気と清楚な感じが、とても良い。表情からは微かな戸惑いと疲れを感じ取られるが、その事で美しさに一層磨きがかかっているようにも見える。だが危うい。これは、歪み、か？それが道明の女性に対する第一印象であった。

「あの……」

女性はいまいち要領を得ない道明の説明に首を傾げながら「はじめまして。私は友安青葉と申します。栄都さんもお久しぶりです」と、唯一の顔見知りである栄都に挨拶を向けた。

女性の声を聞いた事でようやく落ちつきを取り戻した栄都は「お久しぶりです」と、言い争いなどなかったかのような微笑みを一瞬にして創りあげ、青葉に挨拶を返した。

「ああ、ここに二人は、私の部下で名を」

「あ、ご挨拶が遅れました。私、狐蔵境生と言いまして、この栄都君とは竹馬の友のような付き合いをさせて頂いております！」

女性の存在に、美しさに気付いた瞬間、栄都の紹介を妨げ自己紹介を始めた境生に、栄都は汚物を見るかのような視線を投げかけたし、それは道明も例外ではなかったが、境生は二人の様子に気付きつつも一向に構う事なく、財布の中から数少ない名刺を一枚取り出した。

『日本一妖怪退治事務所―所長 狐蔵境生』

説明としては正直で、情報量としても悪くない。しかし、名刺を差し出すことによる不安を払拭する効果に関しては、逆に肥大させる可能性が極めて高い。いずれにせよこれで不信感を与えてしまった事は間違いない。道明がそう思いながら名刺を受け取った青葉を盗み見ると、彼女は予想に反し、ただ驚いていたように名刺を見つめるだけだった。予想された拒絶が感じられない。

道明にとっては不思議以外のなにものでも無かったが、青葉は妖怪退治という職業よりも、どうしてここに來たのか、という点にのみ驚いているようだった。

栄都もそんな青葉の様子に気付き、少し不機嫌そうに「彼らの事は気にしないで貰いたい」と言った。

「はぁ……」

色々な事を素直に受け入れてしまうタイプの女性なのか、それともたんに興味が無いだけなのかもしれない、などと道明が思いを巡らせていると、青葉は境生にとって、ある意味残酷ともいえる確認方法をとった。

「それではお二人は栄都さんのお知り合いの方なのですね」

これはつまり、どれだけ怪しくても栄都の知り合いであるならば許容しようという意味だ。勝ち誇った様に栄都が「まあ、そうです。残念ですがね」と言った。

室内に案内する青葉に従う栄都を恨めしそうにねめつげながら、境生は本日何度目かの舌打ちをした。

白い空間

安友邸は一見シンプルだが、機能とデザイン性が見事に融合した作りとなっていた。適度な幅を持った廊下と、全ての部屋を繋ぐ開放感溢れる一面ガラス張りの吹き抜け。二メートル四方の中庭には、刈りこまれた芝生の上に一本の若木が植えられ、照れながらもその存在を主張していた。

「いやあ、素晴らしい邸宅だ。さすがは青葉さん、センスが良い」
案内されながら境生はしきりと青葉を褒めていたが、都度お礼を返す彼女の顔は浮かぬままだった。

「こちらへどうぞ」

青葉に言われるままに案内されていた三人は、奥にある間仕切りの前で立ち止まった。三人の目の前にそびえる不自然に立てられた間仕切りと扉。扉の奥は二階へと続く階段があったが、木で作られた扉のせいで三人の目からは今は見えない。開放的なデザインのなかで、ここだけ開放感を、何かを無理やり閉じこめたような、そんな不自然さを感じさせる扉だった。

「ほ、ほう、ナチュラルティストで良い扉だ」

いかにもとってつけたような扉の前では、心なしか境生のお世辞にも元気がないようであった。

栄都の美的感覚ではこの扉の存在が許せなかったのか、渋い顔つきで青葉に尋ねた。

「これは後から取りつけたものですか？ 何らかの明確な意図があるとお見受けしますが」

「はい……。一ヶ月程前に取りつけました。理由は、見てもらえば分かると思います」

ここに来て一層の翳りを見せた青葉は力なく呟いた。

どこか投げやりで一向に扉をあけようとしない青葉の態度に、不満気な栄都が扉に手をかけ、一気に開けはなった。

そして瞬時、動きを止めた。

――白。

あまりにも白い。扉の奥。白い世界。それはデザインと呼ぶ事など許されないほどに、配色のバランスが異常だった。フローリングは無残にも白ペンキで塗りつけられ、窓にも白スプレーが隙間なく執拗に塗布されている。階段も白一色となっており、そのせいで立体感を失っていた。すべり止めの小さな溝に出来た影が無ければ、階段だと知るのも難しい。

「こ、これは一体……」

視覚的な奥行きを失い、重力だけを頼りに立っていた道明は、バランスを失わぬよう注意しながら青葉の方に振り向いた。しかし空気の流れを感じたのか、それとも恥じているのか、青葉は苦悶の表情で俯いているだけだった。

栄都は深刻そうな顔つきのまま、黙って周囲を見渡していた。境生はそれでもなお、お世辞を言おうと努力していたが「ああ」だの「うう」だの呟くのが精一杯で、言葉にする事は出来ずにいた。

この空間における無機物は、総じて白色に上塗りされていた。否、有機物は見当たらないだけで、存在すれば当然の様に塗られていたかもしれない。そこは完全に白のための、白の支配する、そんな世界のよう道明は感じた。

催促

「だが、稚拙だな……」

一同を精神的拘束から解放するかのようになり、栄都は呟きながら奥へと歩みを進めた。

栄都が何を言っているのか理解出来なかった道明だったが、続く栄都の仕草を見て、どうやら壁の塗り方について言っているらしい、と気付く。

栄都は壁に顔を近づけ、あるいは指先で触れながら慎重に奥へと進んで行った。

「開けても構いませんか」

結局、間仕切の奥には扉が二つと二階へと続く階段があるだけだった。この家に占める部屋の割合としては、さほど多くはない。

「ええ、そちらがトイレで、その奥がお風呂場になってます」

「フム、こちら面白いですね」

「え、ええ」

フム、栄都は一瞥しただけでそちらにはたいした関心を抱かなかったようで、再び壁に視線を戻した。

「百六十といったところか……ならば百三十……子供、息子さんが」
道明は栄都の目的を会得する事が出来ずにいた。なので「息子がいるのか。だったらそうかもな」と境生が栄都の言葉を受け、更には返答した事が、道明にはとても意外だった。

「おい、こっちを見る」

ガラス窓の前で境生が言った。

「ふむ、そちらはスプレーか」

「ああ、半径四十つてところだろ。幾つだ？」

「十一か十二」

「小六か、有り得るな」

境生と栄都の会話は齒車の様にきつちりと噛み合っていた。しかしやはりそれは不自然だった。少なくとも道明にはそう思えた。意味の分からない会話など、獣の鳴き声と変わらない。そうはさせない、これは僕の物語なのだ――道明は、おいてけぼりを食らうのはごめんだと境生に詰め寄った。

「ちよつと、ちよつと、先生。さっきから二人で何について話しているんですか？」

「ん、ああ、ここをちよつと見てみる。いいか、よく、だぞ」「そこ、ですか」

道明が白く塗られたガラス窓に顔を近づけ、目を凝らすと、そこには薄い筋がいくつか、ドームの屋根のように弧を描いて並んでいた。その丸みを帯びた筋の群は、床から百六十センチメートルくらいの高さに幾つも重なり合いながら並んでいる。

「あの、これが」

「壁の方はほとんど刷毛、のようだね。水性だったのかな」
今度は栄都が道明を顎で促す。

道明が栄都の傍の壁を見てみると、こちらも百六十センチメートル付近に細かい刻みのようなものが見て取れた。

「ここを境に上と下では塗りの粗さが違うだろう」

「粗さ、ですか。まあ、そう言われるとそんな気もしますが」

なるほど、さっきの会話は身長の話か。でも、そう思いついたなら二人で色々言うよりさっさと青葉に確認すれば良いのに、と道明は思う。しかし、栄都と境生の欠落した会話が、これまで幾度も話を切り出す機会があったにも関わらず、そうはしなかった青葉を促したのも事実であったようで、道明が尋ねようとした瞬間、それまで男たちの会話を黙って聞いていた青葉が諦めたように語り出した。

「哉^や来^{くる}です」

「ふむ、それで何時からですか」

「二ヶ月前、になるかと思います」

はじめは小さな物だけだったのです。それに、元々白が好きな子で……。だから気にしなかったのです。身体を締め付け、絞るように言った青葉の左上腕に刺さった己の淡い右爪が痛々しくて、道明は青葉から目を逸らした。

自責

「しかしよくまあ、ここまで放置していたものですね」

ひとしきり確認の終わった栄都が、青葉に向って言った。

「え、いえ、あの」

「しかも、わざわざこんな間仕切用の扉まで用意して。まさか哉来君の自作ではないんでしょう？」

「それは……、そうです。ですが」

「まあ、扉を仕立てたのはこのように色を塗る前だったかもしれないませんがね。塗り出してからそのままとは。まるでゴミ箱に蓋をしたようだ」

青葉の言葉を途中で遮り、栄都は非難を隠そうともせずに容赦なく言った。

静寂と緊迫が綺麗に比例し、そして増幅していた。

おそらくこの中で一番感情的になっているのは僕かもしれない。

ずっと発言を控えていた道明はそう感じていた。何故だかは分からない。でもそう、確かに、母一人では難しい年頃なのかもしれない。まして、頼りになる父、弘哉氏が亡くなってからまだ一年しか経っていない。青葉さんを取りまく環境も知らない。もしかしたら彼女は他にも問題を抱えていて、今の状況は一人の人間の容量を越えているのかもしれない。しかし……「しかし、ここまで……たった一人の親であるあなたが、家中がこんなになるまでほっとくなんて」これでは、これでは単にほったらかしにしたのと変わらないじゃないですか……苦しそうに声を押し出した道明の肩に、境生がそつと手を置いた。

「青葉さん、俺はあなたがどんな気持ちでいたか知らないし、何をしたかも知らない。しかし、このような状態を望んでいたのではな

い事だけは分かります」

そうだろ？　そう問い掛けるような境生の視線の先には、青葉ではなく道明がいた。

「……そうですね。だから依頼した。はい、すいません。そう、僕が間違っていました」

完全に落ちついたわけではなかったが、道明は素直に己の非を認めた。それは納得というより、依頼者を責める事が、個人的にも社会的にも明らかに逸脱している行為だと気付いたからだだった。境生は満足そうに小さく頷き、先ほどからただ苦しそうに話を聞いていた青葉に向かって言った。

「これね、妖怪ですよ」

「え？」

強い恥辱と自己嫌悪に身を委ねていた青葉だったが、境生の思ってもいない台詞に強制的に現実引き戻された。

「だから、これらは全て妖怪の仕業です」

「妖怪……そ、それは」

「ええ、本当です」

「妖怪……」

青葉が妖怪と言う言葉の意味をどれほど真剣に検討していたのか、それは道明にも分からなかったが、彼女の思考の中に多少の隙間を作る程度には機能したようだった。

しかし、次の瞬間、この場にいる者達から弛緩を奪い去るように、栄都が「境生！」と短く叫んだ。

栄都の口から初めて聞いた『境生』という響きは、この場にいる全ての者から、しばしの言葉を奪うに充分なインパクトを持っていた。このときばかりは境生も驚き、真剣な眼差しで栄都を見つめた。

自信

ふう、とため息を一つつき、栄都が言った。

「青葉さん、あなたがご自身への言い訳に、その男の言う非科学的な事象を利用するのは構いませんが」

「そ、そんな事」

「おい、栄都」

「うるさいな、君は黙っててくれ」

「んだと、この野郎！」

「先生！」

栄都は、今にも掴みかかりそうな境生と、それを慌てて止めに入った道明に、「フン」という鼻息と侮蔑の押し詰められた視線を一瞬くただけで、後は何事も無かったかのように青葉に向け、話を続けた。

「失礼しました。あなたは哉来君を病院か何かに連れて行かれてましたか。いや、それ以前に彼の行動理由を直接お聞きになられたか」

「いえ、あの、どちらもやってみようとはしたのですが……」

「何故です」

「え」

「断られた理由ですよ」

「ああ、えーと、その、私には教えたくないだけ」

「病院の方は？」

「行きたくない……」

「——青葉さん」ため息をつきながら栄都が言った。

「あなたも既に十分に大人だ。私がどのような情報を聞きたいのか、いや、聞かれなくともあなたがご自身が自ら伝えるべき情報が何なのか、当然ご理解しておられる筈です」

道明は思う。確かに青葉さんは変だ、哉来君に『行きたくない』と言われて『はい、分かりました』で終わる筈がない、行きたくない理由を尋ねただろうし、だとすればそれをここで言うべきだ、と栄都は続けた。

「言いたくないのなら構いません。それも仕事の範囲と線引きすれば良い。しかし、いずれ僕はその原因を突き止めるでしょう。その情報が必要だと思うからです。そして――」その情報を得るための手段は選びませんよ、栄都はそう言った。

大気の振動が止み、固着された四人の外殻を割ったのは、瞬間的に容量を増す事で限界まで引き伸ばされ、もはや放出する事しか叶わなくなつた青葉の肺が奏でた、小さな、しかし確固たる決意の言葉だった。

「汚れるから行きたくないと。いえ、これでは同じですね、申し訳ありません。体が……折角塗った身体が汚れるから、だから行きたくないと、そう言われました」

「体、ですか」

「はい、哉来はこのような壁だけでは有りません、自分の体をも白色に染めています」

「か、体を染めるって……一体どうやって？ いや、そもそも何でそんな事を」

道明は、白の空間に溶け込んだ一人の少年を想像したが、はつきりとしたヴィジョンが得られぬままに、ただ思つた事を口にした。

「悪いが今は僕が話している」

「あ、すいません」

「これは推測になりますが、哉来君は体が汚れるというより、白以外の色を見る、あるいは身に着ける事を嫌がつてる様に思えますが……」

「そうかもしれません。私もそのような感じが致します。しかし、

いずれにせよ同じ事です」

「同じとは？」

「哉来が何を嫌がつていようと私にはどうする事も出来ない、という事です。病院の先生にも会ってくれませんか、外にだつて出てくれません」

哉来はこの白の領域から一步も外に出ません。無理に連れだそうものなら——死んでやる——そう言われました。青葉の頬を滑る様に零れた涙がその温度を失う頃、栄都が一つの決断を下した。

「よろしい。ならば僕が息子さんを病院に連れていきましよう」

そう言つた栄都の瞳からは、怒りが剥げ落ち、ただただ自信だけが充満していた。

栄都

「お、おい、栄都。何聞いていたんだ。無理矢理連れていくのは危険だ」

不安そうな青葉の気持ちを代弁するかのように境生が言った。

「誰が無理矢理だと言った」

心外な事を言われ、惘然とした栄都は、何かを確認する様に視線を二階に移動させた。

二階へと続く白い階段は数段昇ったところでU字に曲がっており、階下から階上までを目で辿ることは出来ない構造となっている。二階部分はほぼ全体、つまりこの家の中央全てが四角形の吹き抜けとなっていて、二階廊下からも中庭を見えるようにするためか内壁は約百二十センチ程と高くはない。その壁際にそれよりも高い身長の人、推定身長百三十センチの哉来が立っていれば、階下からもおそらく頭部くらいは見る事が可能だろう。しかし、今は誰の姿も見えなかった。

道明は哉来の所在を確かめようと青葉へ水をむけたが、既に青葉の眼差しは栄都同様、誰の姿も見えない二階を静かに捉えており、それはまさしく道明の疑問への回答であった。

「哉来君、聞こえているかね。僕は菱川栄都だ。日本では裕福な部類に入り、かつ影響力も、まあ好ましくはないが、ある人に頼めば、それなりのモノを持っているといっても良いだろう」

栄都の発言に、三人は戸惑いを感じた。

「君の行動や心理は通常のものではない。僕はそれを確かめる為に

も君を病院に連れて行こうと思う。無論只とは言わない。君が正常と判断され、つまりは僕の考えが謝りだったと分かれば、そして君が本当の白の世界を望むのであれば。そうだね、このような家の片隅だけではない、全ての機能を兼ね備えた白い空間を、いや、一つの完全に白に染め上げた世界を、君に提供しよう」

栄都の発言に、三人は恐れを感じた。

ゴトリ――

「もしも白以外を見るのが嫌だと言うのなら、病院から医者、病院までの移動に使うヘリも完全に白色に塗り上げた物を用意する。うん、これでどうだい」

栄都の発言に、四人はそれぞれ想いを馳せる。

カチャリ――

どうしても己の黙想に答えが見出せなかった道明が、堪らずに言った。

「え、栄都さん、そんな事言って大丈夫なんですか？」

「そ、そうだ、お前、適当な事言ってんじゃねえぞ」

「あの、私もそのような費用をお支払いできるか……」

「フン、君達には無理でも僕には出来る。無論、費用は全額僕が負担する」

事もなげに言う栄都の傍らで、道明が「で、出来るんですか」と小声で境生に尋ねた。

「ばーか、そんなの無理に……」

いや、こいつなら出来るかもしれない。いやそれも違う。出来るのだ、きつと。こいつ、菱川栄都なら……

境生の逡巡を駄目押しするかのよう、に、栄都が言った。

「境生、僕が一度でも無理な事を口にした事があったかい」

境生は喉を短く鳴らして、黙りこんだ。

栄都の事を良く思っていない境生が言葉を詰まらせるのを見て、道明は改めて栄都の器を知った。ただ財があるというだけではこうは出来ないだろうと思う。そう、やはり彼は思考のスケールが普通とは違うのだ。

「でも、そこまでして頂くには」

「あなたは、まあ、それなりにやるべき事はやってたようだし、結果、非科学的な要因に結びつけると言う愚考をしかけた訳だけれども、それでも僕に報酬を支払う約束をし、この僕に解決を依頼した」つまり最後の一線を越える事なく、思い留まったと言えない事もない。今回はその事を評価しましょう。

栄都は相手を褒めているのだから貶しているのだから分らない台詞を良く使う。言われた相手はただ戸惑う事しか出来ない。

「はあ」

「後はただ待つだけで良い」

栄都は『僕を信じて』という言葉は絶対に使わない。信じると言う事は、確信ではないからだ。彼にとって、彼の発言は確定事項であり、事実、そうである。

この短時間で青葉にもそれが分かったのかどうかは定かではないが、ともかく、青葉は栄都に任せる事を決めた。

「栄都さん、どうか哉来をよろしく願います」

「お任せ下さい」

「な、なーにがお任せ下さい、だ」

心の動揺を完全に消し去る事が出来ないまま毒づく境生だったが、非難は完全に空回りしていた。もはや非難とも呼べない、ただの愚痴である。

栄都は境生のことなど全く気にする様子もなく、声を張り上げて

言った。

「さてと、これで良いかい」

「いや、ダメだね。全く、全然だ」

思いがけない方向から返答、それも即答だった、があつた事に驚いた道明だったが、返事をしたのは境生だと言う事にすぐ気付き、ほんの少し顔をしかめた。当然、栄都もこれ以上ないくらいの侮蔑と不機嫌を顔にへばり付けて、静かに境生に言った。

「君には聞いてない」

「代弁してるんだよ、なあ？」

まさか……道明は境生の視線の先を追った。そこには、先ほどと同じく二階へと続く階段が有っただけだった。素早く視線を階上、階段が行きつく先へと移す。低い壁に阻まれた影——白の隙間——道明はそこに、ひっそり蠢く何かの気配をはつきりと感じ、軽い眩暈を覚えた。

合意

「いいよ、行っても」

その声は唐突に降ってきたように道明は感じた。人、確かに人の声だったのだが、道明には階段の影に在るモノが人だとはつきり認識できていなかった。いや、無意識に思考の枠から人という可能性を除外していた。もしこれが獣のうめき声だったらきつと道明は戸惑いはしなかっただろう。人……。だから道明は狼狽した。

「ふむ、交渉成立だ」

哉来にとって、自分を病院などに行かせようという行為は愚劣以外のなにものでもなかったが、自分の世界を手に入れられるという条件には、大きな魅力を感じていた。渴望していた。

哉来は知っていた。いまのような小さな世界では駄目だと言う事を。

哉来は気付いていた。白が足りない事を。

栄都は素早く携帯を取り出し、通話ボタンを押すとほぼ同時に喋り出した。

「ああ、僕だ。至急第三病院とスタッフ全員を白色に塗ってくれたまえ。あと、そうだな、青葉さん、この家にはヘリポートありますか」

「い、いえ、ありません」

「そうですか。しょうがない、車を一台、こちらも白に。ん、そうではない、全てを、とにかく完全に、だ。言葉通りにすれば良い。終わり次第ここに」

それからの数十分は、その場にいる誰もが殆ど発言しなかった。時が迷い、重苦しさが堆積する。それでも道明は次第に自分を取

り戻しつつあった。自分が一番確りしなくては。それだけを道明は
念じながら、車の到着を待っていた。

音

栄都が呼び出してから三十分後、一台の真つ白な車が青葉邸に到着し、三秒間ほど奇妙なクラクションを鳴らした。

それは、女王陛下を迎えた近衛兵の鳴らすトランペットのような、あるいは死者に手向ける霊柩車の仰々しいクラクションのような、そんな複雑な音だった。尾を引きながら拡散したその響きは、静かな住宅街には異質の音のように道明は感じた。

それぞれ何かの切っ掛けを待っていたのであろう、室内にいた大人四人の動きは速かった。

なかでも栄都は素早く外に出ると、自ら車と運転手の姿を十分ほどかけて入念に点検し、満足そうに頷いた。

近くで見守っていた三人も特に文句を言うものはなかった。

「さ、行こうか」

栄都は薄く開かれた安友邸の玄関ドアを見ながら言った。

それは酷く緩慢だった。五センチ程動いては止まり、五センチ程動いてはまた止まった。長い時間をかけてギクシャクとドアが開いていく。まるでドアの開け方を忘れたみたいだ、そう道明が思った頃、扉は完全にその動きを止めた。

それは狭く、まるで外界から色が流れこんでくるのを拒むかのような、子供がなんとか通る事が出来るであろう最小限の隙間だった。

そこから出てきた少年、確かに人間の子供で、性は男性と聞いた、は、道明にはとてもこの世の生き物とは思えない姿をしていた。どうやったのかは知らないが、その白さは化粧などというレベルを超

えいるように思えた。青葉が『塗った』ではなく『染めた』と言ったのも頷ける。それ程までに、少年の肌は自然で、滑らかで、そして白い。白は完全に少年と共に在った。道明は後部座席に乗り込む栄都と哉来という名称の少年を見やりながら、その思考回路の殆どを、先ほどのクラクションの正当性について考えるために使っていた。

少女

栄都達を乗せた車を見送り、回答のない自問にも一通り決着をつけ終わった頃、道明は境生を振りかえって言った。

「でも病院に連れて行ったところで問題は解決しないでしょうね」

「おっ、分かってるじゃねえか」

「栄都さんには悪いですけどね」

「良いんだよ、あいつは。あれはもう依頼人のためとかじゃなくて、たんに自分の興味ってだけだろう。ま、あいつもこれで終わったな。んざこれっぽっちも思っただろうけどな」

ふーん、そんなもんですか。境生の栄都に対する正直な評価に、道明は少し好感を持った。また、それは道明の父への信頼回復にも若干の効果を齎したようでもあった。

「ところで先生、気になってたんですけど、さっき女の子がこっち見てませんでした？」

「ん」

「ほら、あそこの影で白い服を着た女の子が」

「いつから」

「僕が外に出た時には居ましたけど」

「珍しい車でも見て追いかけてきたのかな」

「まあ車かもしれませんが、何となく車ではなく、僕らの方をじっと見てた気がするんですよ。哉来君が出て来る前からずっと」

「ありや、見られたかな」

「あ、それは確実です。彼が家から出てきたのを見て、表情が変わりましたから」

「幾つくらいかな」

「さあ、多分小学生だと思いますけど」

「ふうん、目が良いな、お前口リコンか」

「違いますよ、失礼な。僕の目は色々良く見えるんです、色々ですね」

先生のダメなところは特に、と皮肉を続けようとした道明に気付く様子も無く、境生は少女がいたという方向を見つめていた。

「それで視力は？」

「一・〇ですけど」

「は？ 普通じゃねえか、このロリコン」

「じつとこつちを凝視されてたら気になるでしょう？ もう良いですよ」

「嘘、嘘。で、どっち行った」

「三件先の家に入っていったから、その子供じゃないですかね」

「よし、戸締りを強化するよう言っておこう」

「先生、いい加減に——」

「冗談だよ、冗談。まあ、哉来君の事を学校で言わないよう、説得でもしてくるよ。案外関係あるかもしれないし」

「聞いてくれると良いですね」

「説得は得意だ、まかせろ。お前は青葉さんに、そうだな、少年の担任の連絡先でも聞いといてくれ」

「了解です」

少女の家に向ってのんびりと歩き出した境生の背中に視線をおくった道明は、必死に少女を説得する境生の姿を想像し、ちよつと笑った。

密室

栄都は隣に座っている少年を隙間なく観察していた。横顔は凜として、美しい部類に入るだろう。もっとも人として見ているのか、それとも美術品として見ているのか、それは栄都自身にも判断出来なかった。

フム、僕が判断に迷うとは。

少年に対する興味が湧いたのもこのためである。

あいつみたいだな――

栄都は自分の中に巢食った境生を追い出すように頭を振ると、少年を見つめた。

少年は俯き加減で微動だにせず、ただ静かに、そこに存在した。一人だけの世界にあって目は死んでいない。少年の眼は、目の前のただ一点を静かに見つめている。それはあたかもそこに自分の世界を構築する、そんな頑強な意思を感じさせるような視線だった。それは光りのようなかもしれない。ただ真つ直ぐに、誰にも曲げられぬ、誰にも触れられぬ――栄都は少年の唇にそつと触れた。

慣性力だけが支配する遮断された車内に、突如、電話の鳴らす極めてシンプルな呼び出し音が鳴り響いた。

丁度沈黙に耐えかねた運転手が発言する機会を窺っていた時で、思わず肩をびくつかせたが、相変わらず少年は動かなかったし、栄都の受話器を持ち上げる動作にも全く澁みはなかった。

「来たか。よし、ちよつと待て」

そう言つと栄都は速やかに車を止めさせ、後部座席を降り助手席に乗り換えた。

「いいぞ、繋げ」

その言葉とほぼ同時に、車の後部座席を遮断するパネルが現れ、完全な密閉空間を作り上げたが、その間も、少年はやはり微動だに
しなかった。

準備

境生が道明に教えてもらった家に到着すると、少女と黒いスーツを着た体格の良い男が、玄関前で向き合う様にして静かに立っていた。

少女達が佇む後ろに建っている家は、一般的な日本建築からすると遥かに前衛的であると言えたが、安友邸以外の住宅は全て同じ様な造りをしており、特別な個性といったものはなかった。

良いんだか悪いんだか、そう思いながら境生は周囲を見渡し、次いで黒いスーツの男を見た。同年代か、いや、まだ若いな。鍛えている事を全身でアピールするかのようにとっしりと屹立している男は、何故かこの街には受け入れられていない様に境生は感じた。

近づいてくる境生に気付いた少女は、顔を境生の方に向け、その視線を動かす事なく、境生が近づいてくるのを静かに待っていた。真っ白のワンピースに身を包んだ少女は、背丈に似合わず大人びた感じの可愛い顔立ちだったが、その視線はどこか拡散しているようであり、精巧に創られた人形のような感じでもあった。

境生が少女に声をかけようとした瞬間、「お待ちしておりました」と、少女の隣に立っていた黒服の男が境生に向って言った。

「ちっ、せっかく道明に手柄を持たせようと思ったのによ」

男は境生に対しお辞儀をしながら「遅かったな」と言った、ように境生には聞こえたのだが、その声は栄都のもので、良く見ると男の首には小型のスピーカーのようなものがかけられており、どうやらそこから声がしているようだった。

このあんちゃん、主人と違って礼儀正しいらしいな。

「ん、すまないがもう少し大きな声で喋ってくれたまえ」

「何でもねえよ。相変わらず用意が良いと褒めただけさ」

「このくらいは当たり前前の事だよ。少女の両親には既にその男が了解をとっている」

「早いな」

「僕は君達と違って、哉来君の見物が終わり帰ってくる所ではなく、見物に出てくるところを見張らせていたのさ。哉来君が車に乗り込む頃には既にご両親に話を始めている」

「ったく、一体何人に見張らせてたんだよ。目立つためとはいえ、あんな下品なクラクションなんか鳴らしやがって」

「たった百人だけだ」

「はっ！ あんたのご主人は相変わらずバカだな」

境生は栄都には聞こえない様に男の耳元でそつと囁いたが、礼儀正しいと思っていた男からは、今度は何の反応も得られなかった。所詮この男も栄都側の人間なのだ。

「やれやれ」境生は大袈裟に天を仰ぎ、二人と一声の奇妙なやり取りを聞いていた少女に向って軽くウインクしたが、少女からも何の賛同も得られなかった。やれやれ――

解放

「早く始めたまえ。いつまで僕を待たせるんだい」

「お前がわざわざオレを待っているって事は、他の見物客はどうやら外れだったようだな」

「答える義務は無いが、まあそういう事だ」

「いい気味だ。よし、じゃあ始めるか」

そういうと境生は少女の前で身を屈め、少女を見つめた。少女は目前に現れた境生を見ても、あまり動じた様子は無かった。どこか他人を拒絶している感じで、物怖じせず境生の顔を真っ直ぐに見つめ返していた。

「お兄さんは狐蔵境生といってね、妖怪退治を専門にしてるんだ」

一瞬の沈黙の後「え？」と僅かに表情を動かせ、境生を見返した少女の瞳には、拒絶の上から新たに疑惑の層が積み上げられ、それは皮肉にも人形のようなだった彼女に、少しばかり人間らしさを与えていた。境生は気にせず話を続ける。

「それで今、安友家にちよつと悪さをする妖怪が住みついているね、それを退治しに来たってわけ」

「おい、その馬鹿な説明はやめろ」

スピーカーを通してノイズの混じった栄都の声が、楔のように鋭く会話にねじ込まれてる。

「おいおい、その変なスピーカーのせいで彼女が怯えてしまってるぞ、静かにしててくれ」

「ふざけるな、お前のせいに決まってる」

「へーん、悔しかったらこっちにおいでーだ！」

「貴様！」

フフ――

境生と栄都のやりとりが幸を奏し、少女の瞳からは、疑念の間隙をぬって、二人に対する興味の色がゆるりと染み出していた。それは笑みではなく、あるいは呆れだったかもしれない。いずれにせよ、この娘が心から笑ったらさぞや可愛いだろうなと境生は思った。そして、いつか見てみたいとも。

「よし、じゃあ今度こそ本題にはいろうか。ええと、そうだな、まずは名前を聞いても良いかい」

「私は雅」

少女の声は決して大きくなく、また口数も少なかったが、発音は明瞭で、その声にはしっかりとした知性が宿っているのを境生は感じた。

「雅ちゃんは哉来くんの知り合いなのかい」

「そう。クラスメート」

「なるほど」

なるほど、とりあえず許されたのは舞台に立つ事だけか。少女も予測はしていたのだろうが、境生が改めて哉来の名前を出すと、やはりそこには壁を感じさせる何かがあった。何かが――

「哉来君の事、気になるかい」

「そうね」

「それは好きって事かな」

「嫌いではないわ」

「引っ張られるな!」

突如、栄都が言った。少女は驚いた表情で、しかし何も言わずに、首をほんの少し傾けながらスピーカーの方を見つめた。

「君が何によって引っ張られ、伸ばされて、いや、追いこまれたかは知らないが、子どもは子どもらしくしたまえ」

「何を言ってるの。私、そんな――」

「まあ、そんな事より」

そんな事とは何だ、というバックミュージックを余所に、初めて境生から顔を背けた少女に向って境生は話を続けた。

「哉来君は学校で何か変わった事があつたかい？」

「……」

「哉来君がはやく学校に戻れるように協力してくれないか」

「彼は何も悪い事なんてしてないわ」

「おい栄都。この黒服男は、彼女に何て言つたんだ」

「フン、その男からは給料を二割ひいておく」

「そ、そんな、自分はただ哉来という少年について知っている事があれば教えてほしいと言つただけです」

「はい、ストップ。これ以上、この子に責任を負わせるんじゃないよ」

「あ、いや、そんなつもりじゃ」

「おいおい、大の大人がこんな事で泣くなよなあ」

「失礼な、自分は別に泣いてなんかいません」

「じゃあ、この頬を伝う涙のようなものは何だよ」

「あ、え、何かついてますか」

男が慌てて自分の頬を手で確認すると、すかさず「やーい、騙された」と手を叩きながら境生が言った。

呆れ顔の男が何か言おうとするのを手で制しながら「しっかし、おたく……」と深刻な顔で境生は続ける。

「な、何ですか？」

「こうする時に」

境生はさきほどの男の涙を拭うような仕草を真似ながら、「こうする時に小指立てすぎだぜ。どんだけピンピンなんだよ。いや、別に良いんだが、なんとなく違和感がな。あんたのがたいた」と、ばつが悪そうに言った。

「い、いいじゃないですか、べ、別に」

「フム、それは僕も気になっていた」

「そ、そんな、栄都様まで」

フフフ――

瞬間、男は少女に注目し、境生はただチラリと目を向け、栄都は珍しく黙っていた。

自分にスポットライトがあてられている事に気付いた少女は恥かしそうに「あの、ごめんなさい。私、誤解してたみたい」と照れながら言った。

「いや、雅ちゃんは悪くない。こんなターミネーターみたいな男が突然来たんじゃ、誤解するなという方が無理つてもんさだ。まさか見た目がこんななのに、実は乙女チックだなんて、百年後のドラえもんの声優を誰がやってるかって事くらい予想がつかない」

「そうでしょうか？ 自分はなんとなく似た傾向の声優を探すだろうと予測してますけど」

「うるさい、てか、何で平然と答えているんだよ。こっちはお前の少女趣味を暴露しても良いものか、これでもかなり気を使っただぞ」

「あ、自分は別にそんな」

「こらこら、その手をもじもじさせるの、やめろ。ったく、冗談かと思いきや、本格的にその疑いがあるな」

「そうみたいね」

「いや、なんというか」

素早く両手を身体の後ろに戻した男の姿に、少女は笑いのギアを一段上げる。境生も笑った。男も一歩遅れて、少し控え目だったが笑った。どこか重苦しかった空気も晴れ、個性のない街並みも色付きつつあるように境生は感じた。こうして見ると男の服装も悪くない。

「おーい、栄都君」

「ああ、分かっている。給料は引かない」

栄都を除く三人はまるで古い仲間達のように顔を突き合わせ、小さなガッツポーズをした。

「あ、ありがとうございます」嬉しそうに言いながら男は、数回お辞儀を繰り返したあと、少女の手をとり「ありがとうございます」と言った。久々に心のこもったありがとうを聞いたな、と少女の次に差し出された男の手をとりながら境生は思ったが、今度こそはと男に期待して聞いた「栄都って実は嫌な奴だろう？」という質問の答えは、やはりもらえなかった。

「まあ、これはいいか」

「何の話だ」

「何でもねえよ」

「フン、さっさと始めたまえ」

「うるせえな、おい、それ切つとけ」

境生にスピーカーを指差された男は相変わらず、同情するようなあるいは憐れむような面持ちで、静かに首を振るだけだった。

「ちっ、さっきのはあれか、フェイク連帯感か、くそ。まあ、いいで、雅ちゃん」

「はい」

少女は少し緊張した面持ちで、小さく顎を引く。

「哉来君なんだが、何か特徴的というか、気になる事でもあったかい。その、感情的ってのではなく、普通に、学校とかでって意味だけど」

「特徴的？」

「まあ、目立つというか、ちょっと他人と違うというか」

「それは、彼が学校に来なくなる辺りの事で？」

「いや、特に時期は気にしなくて良い」

「そうね、だったら。綺麗な顔をしているわ。私ね、一ヶ月前に横浜からこの街に転校してきたの。それで初めて見たときに、綺麗だなんて思った」

「あ、そうなんだ。あ、いや、うん。他には」

「白っぽい上履きを履いてた」

「ん、それは最近の事？」

「うーん、私が転校して来た時には、もう履いてたけど……。それ以前は知らないわ」

「そっか。それで、その白い上履きってのは目立つ事なの」

「ええ、今度の学校では一年生は皆水色って決まってるから」

「へえ、彼はその時から白が好きだったんだ」

「皆そう思ったみたい。でも、多分違う」

「え？」

「私もそうかと思って聞いたの」

えっとね、私がこの街に来てから一週間経ったくらいだと思う……。少しうつろな表情で雅は話をはじめた。

初恋

「一緒の方角なのね」

学校が終わり、ようやく緊張から開放され、のんびりと周囲を見渡しながら帰宅していた雅は、照度を落しかけた太陽と肌寒い風の抜ける河川敷の綺麗に刈り込まれた芝生の上に、一人で座りこんでいる哉来の姿に気付き、声をかけた。

「え？」

「家」

「ああ、うん、そうみたいだね」

雅が哉来に話かけたのは、新しい学校で初めての授業があった日の事で、雅が落した消しゴムを哉来に拾ってもらった時に言った御礼の言葉以来の事だった。その時の哉来も、今同様無愛想だったが、雅は不思議を哉来に好感を持った。それは、彼独特の孤独感が、雅に何処か親近感を抱かせたからかもしれない。

二流河川とはいえ、新興住宅街に相応しく、両側に幅二十メートル程の遊歩道、ベンチ、また所々には子供用遊具までが整備された河川敷にしては、その時は人通りが少なく、だから、ちよつと大胆になった雅は哉来のすぐ横にちよこんと腰をおろし、哉来と同じく体操座りをして、無遠慮に哉来の顔を覗きこんだ。

「哉来君だよ、何してるの」

「……」

「あ、それ上履き。だけど、ちよつと汚れてるね」

雅の事などあまり気にしていない様子で俯きながら、手にしていた上履きを見ていた哉来は、顔を上げ、雅を見た。微かに密度を変えた大気の流れが、哉来の細く艶やかな髪を静かに揺らす。少しだ

け目にかかった髪の隙間から、哉来は訝しそうな表情で「僕が汚しているんだ」と言い、再び視線を自分の足下に移した。

「え、どうして。お靴、嫌いなの？」

哉来の手に使っていた上履きに手を伸ばし、汚れを指でなぞりながら、雅は聞いた。

急に視界に入りこんできた、自分と同じような、だけど、確実に違う他者、滑らかで何故か触れるのを躊躇わせるような、そんな腕に驚き、意識を誘われた哉来は、つい「好きじゃないよ。だからこうして汚してるんだ。じゃないと新しいの買ってもらえないから」と、無口で他人と話す事が苦手な彼にとっては珍しい、素直で率直な気持ちを口にした。

「今度こそ皆と同じのを買ってもらえるかもしれない」

「ふーん、そうなんだ。私は好きだけどな、そのお靴」

「え？」

制御下に戻りつつあった意識が、再び急速に昂揚し始めた哉来は、「これが？」と靴を指差し、自分を落ち着かせるための確認を少女に求めた。

「うん、私も真似しようかなって」

「ああ、うん、でも多分無理だよ」

「どうして」

「うちの学校は規則には結構厳しいんだ。だからよっぽどの理由が無い限り、規則通りに青い靴じゃないといけないと思う」

「あなたにはあるの、その、よっぽどの理由っていうのが」

少女から顔を背けながら、哉来は「うち、金持ちだから」と悲しそうに呟いた。

「そっか、残念」

「君は他人と違う事が怖くは無いの」

「私は、うーん、どうだろ。でも……」

雅は再び哉来の手にある上履きに手を伸ばし、その汚れを払った。

哉来は、静かにその行為を見守っていた。

「でも、便利じゃない。探す時とか」

そう言って微笑んだ少女の顔は、哉来が忘れかけていた笑顔を、彼に思い出させるのに充分だった。

「君は優しいんだね」

それは、感情の溶け出したような、少女にとって見た事のないような、そんな笑顔だった。

「な、何言ってるの」

「ありがとう」

「私は本当の事を言っただけよ」

雅は、それ以上は何も言えず、哉来も何も必要としていなかった。しかし、ただ並んで座っているだけでも、その時の二人は満たされていたし、初めて感じる感情も心地よく受け入れていた。

非科学

「ふむ、興味深いな。確かに白が好きだったとは言えないようだ」
「おいおい、お前何聞いていたんだよ。この淡くて甘い初恋のだな」

「ちょ、ちよつと、おじさん！」

雅が慌てて境生を止める。

「まったく、君こそ何を聞いていたんだい。本当に馬鹿だな、君は」
「なんだと、こら」

「まあまあ」

随分と境生に馴れ馴れしくなった男が境生をなだめていると、雅の家の玄関が開き少女の母親が姿を現した。

「あの、そろそろ。もう遅くなりましたし」

「栄都様」

「うむ、構わない」

そう聞くと、黒服の男は母親の元に行き、二、三、言葉を交わした後、彼女に深々とお辞儀をした。

「雅ちゃん、こつちにいらつしやい」

母の呼ぶ声に少女は頷き「それじゃ、さようなら」と、境生と男に小さく挨拶をして家の中へと足早に帰っていった。

かわいかったな、と境生が男に水を向けると、男も「ええ、そうですね」と同意した。

「もうちよつと話していたかったぜ」

「ふん、これ以上君と一緒にいると馬鹿がうつる危険があったから、このくらいで丁度良い」

「ああ、んだと。非科学的な事は嫌いじゃなかったのかよ」

「君に限っては、これは非科学的ではない。現実だよ。百パーセントうつる」

「てめえ、今すぐここに来やがれ、ぶっ飛ばしてやる」

「ふ、どちらも非現実的だな」

「はっ、怖いなら怖いって言えばよ」

「なんだと!」

「なんだよ?」

男が仲裁を諦めている頃、道明は青葉に哉来の担任の連絡先に
ついて聞いていた。

伝承

「これでよし、と」

リビングに据えられた柔らかなソファに座りながら、連絡先をメモ帳に書きとめ終わった道明は、勢い良くパタンと閉じて、変わりについて先ほど青葉に差し出された紅茶を手を取った。

「あの、お砂糖は」

ガラスにシルバーで装飾されたテーブルの向いには、青葉が静かに腰掛けている。

「あ、いえ。このままで」

道明は、紅茶の味や香などを少し苦手としていたが、この時初めて、紅茶も美味しいと思った。

「あの……」

僅かな衣擦れの音を立て、青葉は道明の方に向って身を乗り出した。押し殺したような声に、道明はいやおうなく緊張する。

「あの、先生方はやはり、その、何か見えたりするのでしょうか。」

栄都さんには悪いのですが、どうしても気になって」

「え、えと、まあ、それなりに」

「やはり……それで、その、や、哉来は何かに憑りつかれていたりするのでしょいか」

恥かしさは残っていたものの、それを上回る不安に付き動かされるようにして、青葉は道明に聞いた。

リビングと、つい先ほど少年が通ったであろう廊下を隔てた扉の付近を見ながら、どう答えるか思案していた道明だったが、思いきって答えた。

「ええ、といっても、憑くというより操られてる感じでしょうか」
出来るだけ感情を込めずに道明は言ったが、その言葉を聞いた瞬間、絶望を隠そうともせず、青葉はソファに沈みこんだ。

「青葉さん、もしかして、何か見たのですか」

「いえ、見えたという訳ではありません。ただ、何か感じたと言うか……」

「そうですか。えーと、青葉さん、青葉さんはこの土地に伝わる言い伝え、古い伝承の事を知っていますか？」

「……はい、知っています」

そう、たしか椿姫ですよ……

——千三百年以上も前に、この辺りを支配していた豪族、畠山小連が正室、椿姫。とても嫉妬深く、妾達を激しく恨んでいた。毎日執拗に多量の鉛白粉おしろいを塗らせては、鉛白の毒性により病み、そして死んでいく妾たちを笑っていたという。一方、姫自身は夫でもある小連が好んでいた色、血のように燃える紅の、艶やかな着物ばかりを着用していた。そんな浅ましい椿姫に対し、小連の心は益々離れていった。どうしても首領の気を惹くことが出来なかった彼女は、やがて彼女自身の子、我が子の血を使って染めあげた、深紅の着物を創ろうと試みる。しかし、椿姫の思惑を知った妾の一人により、その企みを知らされた小連が、すんでのところ椿姫を殺害。最後は、自分の血飛沫を全身に纏い、死んでいったという――

「え、ああ、良くご存知でしたね」

この街に道明たちがやってきたのは、血なまぐさい伝承が残っていたからだ。それは、少しでも妖怪退治という名目のバックボーンを作り上げようとする営業活動の一環、苦肉の策でもあった。もしかしたら何かに使えるかも、という境生の思いつき発言がこの街に来た一番の理由で、道明自身はそのことに関しては全く期待していなかった。だから、青葉のような女性が伝承の細部まで詳しく知っているのは、少し意外だった。

「この住宅街の建設プランが上がった時に調べたんです。そういつた謂れを好まない人は多いですから」

「ああ、なるほど」

「でも、どうして。椿姫に照らすなら、あれは他人を白色にするのでしょうか？ でも哉来は自分を塗ってるんです。いえ、それ以前に哉来は男です」

そう、確かに変だ。「ま、まあ、こう言った話は時代や時に合わせ、容易に変容しますから」だからでしょう、とりあえず道明はそう答える事にした。

釈然としないながらも青葉は「でしたら！ 幾らかかつても構いません、とにかく退治してください。あなた方は……退治屋さんなんでしょう」責めるような眼差しが道明を捉えていた。

弱ったな、どうしよう。妖怪退治屋としてはありがたい話ではあったが、伝承をここまで信じきっている青葉の真剣な眼差しを見て、その事が良い事なのか悪い事なのか、道明には判断出来なくなっていた。

ひとしきり逡巡した後、道明は「それがそう簡単にはいかないのです」と、少しずつ説明を始めた。

「その、こういった場合ですね、まずは結び付きを弱めないといけません」

「結び付き？」

「ええ、おそらくこの家には、椿姫を呼んでしまうような、何かがあるでしょう。まずは、それを探し出す必要があります」

「すぐには分からないのですか」

「申し訳ありません」静かに瞼を落し、一呼吸した後に、再び開い

た道明の瞳には覚悟を決めた、力強い意思が宿っていた。

「ですが、少しお時間を頂ければ、必ず見つけます」

「うむ！ 良く言った」

「え、先生？」

振り返った道明の視線の先には、片手を上げながらリビングに入ってくる境生の姿があった。

「あまりに静かなドアだったので、お気づきにならなかったかな。

青葉さん、すみませんが勝手に上がらせて頂きました」

「あ、ええ、構いません。今、お茶を用意しますので」

「どうぞお構いなく。それに、事務所に戻って調べたい事もありますので」そういうと境生はあごをしゃくり、道明を促した。

「あの、それじゃあ、御馳走様でした」立ち上がった道明は何かを言いたげに青葉に目をやったが、すぐに向き直り、境生とともに玄関へと向かった。青葉は二人の背中に向け「どうか、哉来の事、お願いします」と涙を浮かべて言った。振り返った境生は、きつと解決してみせます、と力強くうなずいた。

玄関を越えて見送りに来ようとする青葉を制し、二人は軽トラックに乗りこんだ。玄関前で深々と頭をたれる青葉の姿が、道明にはなんだかやけに小さく見えた。

思惑

青葉邸から帰る途中、二人は自動販売機に立ちよりコーヒーを買った。車内で境生が雅について一通りの説明をし終え、しゃべりすぎて喉が乾いたと言いついたからである。

「へえ、でもそれってあまり関係無さそうですね」

「ん？」

「雅ちゃんですよ」

「まあなあ」

「せめて彼女の転校が二ヶ月以上前だったなら可能性あったんですけどね」彼女が転校してきたのは一ヶ月前。一方、哉来が部屋を白に染め出したのは二ヶ月前である。

「可能性ねえ」境生はテイステイのプルトップを空け、半分ほど一気に飲んだ。ようやく一息ついたのか、暫く思案したあと残り半分を一気に飲み干し、もう一本、今度はエメラルドマウンテンを買った。

「そうそう、それよりなんだっけ、椿姫だっけ」

「そうですね、もう忘れたんですか」

「そもそもそんなに詳しく調べてないからな。よいしょっと」

境生はコーヒーを片手にもち、面倒くさそうに車に乗り込んだ。

「そりゃあ調べたのは僕ですが、先生にもちゃんと説明したでしょう」

道明は人通りの少なくなった道路へ、車を進めながら呆れた眼差しで境生をチラリとのぞいた。

車は出来るだけ人通りの少ない路地を選び、事務所へと向かっていった。

境生は手にした缶コーヒーを揺らしながら「良いんだよ、大体でちゃんと知ってる人の方が珍しいんだから」と、つまらなそうに言った。

何を考えているのだろうか。ちらりと横目で見た境生が罪悪感を感じている様に道明には見えた。

「まあ、それはそうですね……」

暫く沈黙が続く車内で、残ったコーヒーと苦い感情を胸に流し込んだ境生は、吹っ切れた表情で見慣れた風景を眺めた。

「まあ……」

「え？」

「ん、いや、使えそうなところだけ使って、後は臨機応変につてな」

「そうですね……。でも出来るんですか、先生に」

「あ、てめっ、このやる」

「ははは、さ、着きましたよ」

二人は事務所に到着すると、早速、哉来の担任へ連絡をとった。

翌日の十八時であれば時間があると言う。アポイントを取り終えた境生は、窓から暮れ出した街を眺め、思い切り背伸びをした。

「さてとっ、次は椿姫だな」

「え、椿姫が何か？」

「おかしいだろ」

境生は、この事務所にある唯一つのデスク、つまり境生のデスク専用チェアに深深と体を沈めると、考えをめぐらせ始めた。境生に拾われたチェアは、持ち主の思考のリズムに合わせギイギイと音を鳴らした。道明はこの声のような音が好きだった。レギュラーコーヒーを境生のデスクに置いたあと、客用のソファアに腰掛け道明が言った。

「ええ、たしかにおかしいです。って、なんだ、覚えているじゃないですか、椿姫」

「他に何かないのか？」

「何かと言うと、そのそっち系の……」

「そそ」

「ないですね」

「そっかぁ」

境生は道明の返答に素直に納得した。父から何か聞いていたのかな。そう思いつつも道明は何も尋ねなかった。いずれにせよ答えは変わらない。過程は問題ではないのだから。道明は静かにカップをテーブルへと置いた。

焦り

翌日、夕暮れと共に、哉来と雅の担任である東雲有紀が待ち合わせの喫茶店に到着した。

有紀は予め電話で聞いていた入り口近く窓際の席に二人の男が座っているのを確認すると、お一人ですかと聞いてきたカウンターの女性に軽く会釈をし、二人の待つ席へと近づいていった。有紀の地味すぎるグレーのスーツにとっては、黄昏の光りだけが唯一の装飾だった。

「あの、狩夜道明さんでしょうか」

「あ、東雲有紀先生ですね。すみません、お忙しいところをお呼びだとして」

道明は立ち上がると有紀に挨拶をし、二人の向い側の席をすすめた。

「いえ私は大丈夫です。それより哉来君の事で聞きたいことがあるとか」

そう言いながら有紀は、ビニール地に少し堅めのソファに腰掛け、対面の二人を観察した。

一人は男にしては線の細い体つきで、見た感じ真面目そう。でも、どこか犬のような感じを受ける。有紀は初対面で人を動物に例える癖があった。これは記憶という作業を簡易化すると共に、人見知りしやすい有紀から緊張を取り除く効果も持っていた。もう一人は……と、そこで犬と判断された道明の発言によって有紀の思考は中断した。

「ええ。その、学校なんかでの様子を伺えたら、と思ひまして。あ、こっちは僕の上司の狐蔵境生です」

「どうも。日本一妖怪退治事務所を経営しております、狐蔵境生です」

上司と紹介された男は、そう、狐だ。ただ狡猾さは感じない。でも、何かが……と、そこで有紀は改めて境生の発言を思い出す。ようかい？

「え、ようかいだい、何ですか」

「あ、いえ、探偵みたいなものですのでお気になさらず」

道明は有紀に名刺を渡そうとしていた境生の手から慌てて名刺を奪い取り、不満気に何か言おうとする境生を制し、有紀に笑顔を向けた。

良く分からないまま、疑惑を孕んだ表情の有紀だったが、道明が注文していた有紀用のコーヒーが届くと、ウェイトレスと道明達に小さくお礼を言い、話を続けた。

「あの、ご承知かもしれませんが、哉来君は現在、登校拒否というか」

「ああ、その辺りの事情は知ってます。青葉さん、あ、哉来君のお母さんですね、その方に依頼されたものですから」

道明は砂糖のビンを持ち上げ、有紀に要りますかとジェスチャーで尋ね、有紀は頭を下げてそれを断った。ティーカップを袂に引き寄せ、しかし、飲まずにその湯気の向うに写った自分を、焦点の合わないままに見つめていた有紀だったが、やがて手を離して言った。「そうでしたか。やっぱり、お母様は学校、いえ、私を疑ってるのですね」

「は？ いいえ、別にそんな事は仰っていませんでしたけど」意外な返答に慌てて道明は言う。「あの、どうしてそう思われたのですか」

「いえ、先ほども菱川探偵事務所の方が来られて、その、色々と聞かれたものですから」

また、あいつか——「ああ、栄都って奴でしょう。あいつは馬鹿ですから、あいつに何を言われようと気にすることはない」いえね、

本当にあいつって馬鹿なんですよ。それに、人の仕事の邪魔しかないんですから、とそのまま延々と栄都の悪口を言いそうな境生に歯止めをかけるべく、道明は有紀に「この人とその人の事はとりあえず置いて、まあ、ともかく、そう言った誰が悪い、みたいな話は全くなかったですから」と説明した。

「はあ」

「僕らはただ最近特に哉来君の様子がおかしいので、何か解決のヒントになるようなものがないか調べているだけです。決して先生を疑っている訳ではありません」

見知らぬ男達の訪問、自分への疑惑に対する疑心暗鬼、それらを完全に消化する事は、今の有紀には無理だった。が、おぼろげな罪悪感と身勝手な希望が彼女を突き動かした。

「そう、でしたか。分かりました。私に分かる事であれば……何でも聞いて下さい」

「ありがとうございます。あ、でも変に構えず、気付いた事があれば教えて下さるだけで結構ですので」それじゃあ、と何を質問するか考えていた道明の隣で、境生が身を乗り出す。

「哉来君は入学当初から白い上履きを履いていた様ですね。何故だか知ってますか」

「はい。哉来君のお母様からどうしてもお願いされたので。一応、規則では青と決まってはいるのですが、学校としても特に強制するほどの事でもないですし、白でもかまいませんと返事いたしました」
「どうしてお母さんは白の上履きを履かせる様頼んだのかは知ってますか」

「ちよつと理由までは」

「そうですか」

ふむ、青葉さんが……境生は背もたれに体重を預け、ぼんやりと虚空を見つめた。その姿を確認し、道明が発言した。

「あ、あのつ、それが原因で苛められてたつて事はありませんでしたか」

「いえ、それはなかったと思います。教師の目には届かない部分もあるかもしれませんが、私なりに哉来君のお母様から相談をされて以降、ずっと注意して見ていたのです。それでも何もありませんでした、本当ですっ」

「あ、だから有紀先生のことを疑ってるわけでは……。あの、すみません」

打ちひしがれた助手に変わって、境生が尋ねる。

「哉来君のお母さんから受けた相談つてのは聞いても構いませんか」

「あ、お母様から聞いてなかったのですか」

「ええ」

「実はその哉来君の上履きですが、妙に汚れて帰って来た事があつたらしく、苛めがあつてるのではないかと連絡がありまして」

普通の有紀であれば、少しでも他者のプライベートに関わる事は安易に発言しなかった。しかも、更に自分の立場を危くする可能性のある内容である。しかし、彼女にとってこの事を話すのは二回目で、しかも一回目はつい三十分程前に話したばかりである。相手は有名な菱川栄都だったしその知り合いであるならば、という思いがあり、境生の質問にも素直に答えた。

「ああ、それでしたら苛めではありませんよ」

「え、そうなんですか」

「栄都に聞きませんでしたか？」

「いえ、聞いていません」

栄都さんなら言わないだろうな、道明はそんな気がした。

「まあ、それはちょっとした事故みたいなもんです。その事については先生は何も心配無い」

「それは……」

「ええ、実はですね、これが哉来君の雅ちゃんとの甘い」

「先生」そう言つて道明は境生の腕を掴んだ。

「良いんですか？」

「む。有紀先生、今のは忘れてください」

「あの……、雅ちゃんって私のクラスの……」

「あ、いや、その」

「関係ないかもしれませんが、うちのクラスには雅ちゃんといって、もう一人白い上履きの子がいるんですよ」

「それは……」

「一ヶ月ほど前に転校してきた子なんですけど、哉来君の近くに住んでる子なんです。哉来君が学校に来なくなつて、ちよつと寂しうに見えました。だからもしかして思つたのですが」

「え、彼女、今、白い上履きなんですか」

「あ、やっぱり雅ちゃんもご存知なのですね。そうです、彼女も最近白い上履きを履いてるんですよ」

道明にとつて特に驚く事実ではない。だが、何かが引つ掛かる。そしてそれは境生も同様だった。

「先生は先ほど、強制するほどではないと仰いましたが、規則から外れるのは難しいのではないのですか」

「ええ、まあ。でも雅ちゃんの場合は正当な理由がありましたから」「正当な理由、ですか」

「ええ、ほら、雅ちゃんって生まれつき目がちよつと弱くて、色をあまり認識出来ないでしょう。ですから、上履きも目立つ様にとの配慮があつたそうです」

「ちよつと待つてください」

「はい？」

「その、雅ちゃんの目が弱いとは、どういう症状なのですか」

「ああ、なんでも薄い色は全て白っぽく見えて、区別がつけ難いとかって聞きましたけど。軽度の全色盲、だったからしら」

「そうか、それであの娘は、白っぽいつて言つてたんだ……。うし、もう一度話を聞いてみるか」

「でも先生、雅ちゃんは関係ないんじゃない？ 時期的に」

「もしかしたら白く塗り出した時期より学校に来なくなった時期が大事なのかもしれん」

「え、ああ、そうか。確か雅ちゃんは一週間ほど経ってから哉来くんと会話している。と言う事は哉来君は部屋を白く塗り出してからも学校に行っていたのか」

「うむ。有紀先生」

「は、はい」

「哉来君が学校に来なくなったのは正確にはいつからですか？」

「二週間前です」

「ちなみにこの事を栄都には？」

「いえ、言ってません」

もしこの事が何か関係していれば、境生が有利かもしれない。ようやくチャンスが巡ってきたのだ。だが、学校に来なくなった時期がどう大事なのか、それが分からない。しかし、いずれにせよ僅かな可能性に縋るしか境生に勝ち目はないのかもしれない——そう思った道明の隣には「あいつ何を焦っているんだ」と俯き不満気に呟く境生がいた。

「先生？」

「ん、ああ」

我に返った境生は、立ち上がり有紀に向って言った。

「有紀先生、今日は色々教えて頂きありがとうございました」

慌てて道明も立ち上がり、有紀にお辞儀をする。

「あ、いえ。それよりも哉来君のこと、私からも願います」

大の大人が順番に立ち上がり、深深と頭を垂れている姿は周囲の注目をさほど集める事なく終了し、残された伝票は道明の手に無事到着した。

好敵手

家まで送りますとの申し出を、丁重にしかしきっぱりと断った有紀の背中を、残念そうに見つめながら軽トラックに乗り込む境生に、「行くのですね」と道明が尋ねた。

「ああ」

「関係あると良いですね」

「ない方が良い」

「は？ でも……」

相変わらず騒々しい音をたてる車の中で、道明はしばし考えた。緩やかな景色の流れが思考のリズムを作る。

「でも、それだと先生が不利になりませんか。栄都さんは同じ情報を僕らより先に掴んでいる訳ですから」

「まあな」

「まあなって……」

どちらが勝つかという事は、道明にとっては既に興味を失いつつある事項であった。ただ、本人も知らず知らずのうちに境生に惹かれる部分もあったのであろう——そんな複雑な表情をした道明を、不満気だと勘違いしたのか、境生は足を組み煙草に火をつけて言った。

「トラブルを収斂させる力は、おれよりあいつの方が上だ」

何も言っただけじゃない気がして、道明は答えなかった。

「解く力も多分、な」

暫く沈黙があり、道明が言った。

「それじゃあどうして勝負なんか？」

「なーんかな、今回のあいつ変な気がしてな」

「ああ、街をやるとか言っていましたもんね」

「いや、それはいつも」

「あ、そうなんですか……」

「焦ってるっーか、急いでるっっーか」

「仕事速かったですもんね」

「それもいつも」

今度は道明も何も言わなかった。ただ、きっと境生は栄都の事が好きなんだろう、そう思った。

決別

劈くエンジン音にようやく耳が慣れた頃、境生達を乗せた軽トラツクが青葉の家へと到着した。

庭には昨日、哉来を運んだ白い車が停まっていた。道明が気になつて車内を良く見てみると、真つ白な運転手が微動だにせず座っていた。

「どうやらもう検査結果がでたみたいだな」

道明に少し遅れて車から降りてきた境生は煙草に火をつけようと
して、やめた。

「帰ってきてるんですかね、哉来君」

「じゃないとあの車は使わないだろう」

「ですね……どうします？」

「おれは今から雅ちゃんの家に行く。そうだな、お前は栄都を止めといてくれ」

「自信ないです」

止めるという行為が何を指すのか道明には良く分からなかったが、いずれにせよ道明が栄都の意思に反する行動は取り難いと思ったし、それは境生にしか出来ない仕事だと思った。

「じゃあ話を聞いとくだけで良いや」

「了解です」

「じゃ」

そう言つて右手を軽く上げ、雅宅に歩いて向おうとする境生の背中に向つて、道明が言つた。

「先生……」

「ん」

「この件が終わったら、僕……辞めます」

振り返り、そうかとただ一言だけ言つた境生の表情は、闇に消さ

れて道明には確認できなかった。

「すいません」

「謝る事ないさ」

「でも……」

何か言おうとする道明を手で制し、境生は雅の家へと歩を進めた。
「分かってる、前にもあったから。じゃあまた後でな」

そう、前にもあった。だから、でも、早かった、早過ぎた……。
境生の舌打は湿った大気に干渉されて、あまり響かなかった。

桃色

境生が雅家のインターホンを押して乾いたベルの音が短く響いたあと、暫くしてからゆっくりとドアが開いた。

玄関という空間からするりと抜け出てきた彼女の姿は、ぼんやりとした夜の闇の中にあって強いコントラストを描いていた。境生が初対面した時と同じく、今回も白の衣服に全身を包んでいる。

「あら、おじさん、今日は遅いのね」

「おじ……、ちよつと、哉来君、というより君の事で、聞かせてほしい事が出来てね」

「何かしら」

「今日、有紀先生に会って哉来君の話を聞いてきたんだが、今は雅ちゃんも白い上履きだそうだね」

「ええ、そうよ。白って好きなの。嘘つかなくて済むもの」

「嘘？」

「ええ。私目が悪いの。知ってる？」

「すまん、聞いた」

「良いの。私、嘘嫌いだから」

「その、良かったら白と嘘にどんな関係があるのか聞かせてもらえるかな」

「ええ、いいわ、昔ね……」

正直に話すのを考えているのか、それとも記憶を手繰り寄せているのか、境生には判断できなかったが、少女にとってそれはあまり話したい内容ではないように思えた。

まだ、私が横浜に住んでいた頃ね——少女はそう言って、頬にかかった髪を指先で弄った。

「雅ちゃん、明日の卒業式はどんな服で行くの」

「あ、さところちゃん。私はねえ、白いフリルのついた服で行くよ。」

お母さんがね、明日のために買ってくれたの」

「うわー、良かったね。そっかあ、じゃあ私も白い服でいこつと」

「お揃いだね」

「うん、あ、だけど、嫌？」

「そんな事ないよ。嬉しい」

「本当、良かったあ。じゃあ、約束だね」

「うん、約束」

そこまで話すと雅は玄関を背にしてしゃがみこみ、目の前にある小さな石を手に取ると、手の平でコロコロと転がしだした。

境生は嘘を嫌っている雅が悲しかった。同情ではない。嘘がいけない事だと理解するだけなく、この年齢で己を強く戒めている雅。その存在が少し悲しく思えたのだった。

「無理に話さなくても良いよ」

「良いの、おじさんに話すと楽になる気がするから」

「そうか、それは光栄だ」

弱さと決別するように、雅は手にしていた石をそつと地面に戻し、

話を続けた。

「それでね、嘘ついちゃった」

「嘘」

「そつ、嘘」

「雅ちゃんの嘘吐きっ」

「え、何、どうして」

「何よつ、とぼけないでっ。昨日、一緒に白いお服で来ようねって約束したじゃないっ」

「だから、この服を……」

「何、言ってるの。どう見てもその服、ピンクじゃない。もう雅ちゃんなんて嫌いっ」

「あ、待って」

「さとこちゃんはね、お揃いが好きだったの。色んなものをお揃いにしたわ。それで私達、良く双子に間違われたんだあ」雅は悲しうに笑った。

「さとこちゃんは一人っ子だったのかい？」

「そ。私もさとこちゃんも一人っ子。だから姉妹つてのに憧れていたのかもね」

手についた泥を払いながら、雅は素早く立ち上がり境生に言った。

「おじさんは兄弟いるの？」

「うーん、どうだろう。おじさん、孤児だったらしくてね」

「え、じゃあ親も」

「ああ、物心ついた頃には栄都と一緒に育てられてた。まあ、あいつは親いるけど」

「へー、栄都さんと一緒に」

「ああ」

「だから仲が良いのね」

「まさか」

おどけたように肩を上げて答えた境生に、雅は小声でごめんなさいと謝った。

「気にする事ないさ。雅ちゃんのご両親が好きなんだね」

「うん、パパもママも大好き。でも、あの時だけはちょっと嫌いになったかな」

雅は笑いながら背後の扉をチラリと見たあと、唇に人差し指を当てて「内緒よ」と言った。

お母さんはさとこちゃんのお母さんとお話してたから、私達が傍で何を話していたか知らなかったのね。

「あら、雅、どうしたの？」

もう私はその時、何をどうして良いか分からなかったし、段々悲しくなって、気持ちが昂ぶって。今思うと、単純に怒ってたんだと

思う。いえ、きつとそう。

「ねえ、ママ、今日のお洋服……これは白じゃないの？」

「ええ。今日だけはピンクをね」

「どうして……。ピンクなんて買っても、私には分からないのに」

「雅、そんなこと言わないで。あなたの目はもうすぐ治るわ。先生が仰つてたの。治療法が見つかりそうだってね。だからその時、いつか目が明瞭と見えるようになったとき、あなたに今日のお写真を見て欲しかったの。色とりどりに写つたあなたの姿を」

「……」

「きつとあなたも今日のピンクの服を気に入ってくれるわ。だって、とっても似合っているもの」

「……ありがとう。……でも、でもっ、目が治るまでは白だけでいさせてっ」

「そっか、それで……」

「おじさんが悲しい顔しないで。あ、やっぱりこれでさっきのおあいこ」

「オッケー、了解」

境生は雅の前で大げさにオッケーサインを作った。

「あ、それからもう一つ。哉来君の家に行った事とかあるかな、そうだな、二週間くらい前に」

「ええ、行つたわ」

「そのとき何か言われた？」

「今の自分の姿はどうだ、気に入ってくれるかって聞かれた」

「ほう哉来君もなかなかの直球ボーイだな。それで、雅ちゃんはなんて答えたの」

「うーん、良く分からないって答えた。お部屋も白っぽかったし、その時は哉来君も白っぽいい格好していたから」

「なるほどね。うん、うしっ、今日は遅くまでありがとうな」

境生が立ち去ろうとする気配を察した雅は、境生の袖を掴み、俯

いて聞きにくそうに言った。

「ねえ。哉来君が学校に来なくなったのは私のせい、かしら。私、もしかして彼の嫌がる事、何かしたのかしら」

「うーん、多分逆だよ」

「逆？」

「もうすぐ哉来君も学校に来るようになるから、そしたら直接聞いてみるといい。私の事どう思ってるのってさ」

「そんな事……聞けない……」

「はは。お母さんの言ってた通りだ」

顔を上げて不思議そうに見つめてくる雅の頬を、境生は指で優しく触れる。

「君はピンクが良く似合う」

「もしかして私、赤くなってるの？」

再び俯いた雅の横で境生は立ち上がり、雅の頭を二度撫でた。

「ああ、益々かわいくなつた。目が治ったら鏡を見てみるといい」

雅は小さい頬を膨らませて、境生を睨んだ。

「ははは」

「ねえ、哉来君、学校に来てくれるかな？」

「お兄さんに任せとけて」

今なら『お兄さん』も受け入れてもらえると思った境生に、雅は優しく笑顔で答えた。

「ちえ、残念」

胎動

青葉邸から境生を見送った道明は、ひとり安友家の玄関へと静かに向っていた。歩きながら別れ際に言った境生の言葉を思い出していた。

『分かってる、前にもあったから』そう言っていた境生は、確かに悲しそうだった。

もしかしたら、前にも誰か境生の元へ送り込まれたのだろうか。果たしてそれは試験なのか、監視なのか。

道明にとって境生という存在は危険な存在でもあった。それは彼が妖怪退治という職業についているからである。ただし危機感を覚えるほどではない。道明にとって境生のキャラクターは脅威ではなく、むしろ好感をもって受け入れる事の出来る存在となっていた。

道明の父は、何も説明せずに、ただ境生の元へ行くよう言っただけだった。道明にとってこれは単なる試験であるはずだった。己の力を認めてもらうための試験、あるいは試験。そのために境生という人間を利用しているに過ぎない。それでも小さな罪悪感が道明の心に澱となって残っていた。

しょうがない

これは僕の物語なのだから……

目前にそびえる最後の関門が今、開く――

世界

栄都は扉から顔を覗かせ辺りを見渡すと僕に向って言った。

「思ったより遅かったねえ。それであのアホは？」

「ああ、ちよつと遅れるそうです」

「ん、何が可笑しい？」

「いえ、仲が良いなと思ひまして」

「フン、馬鹿馬鹿しい」

寄り道などしてないし、時間的には決して遅くないはずだ。それでも思ったより遅いということは、それだけうちの先生のことを買っているんだな。素早く踵を返した栄都に従い、僕もついて行く事にした。

「ま、良い。君に証人になつてもらふとしよう」

「検査結果出たのですか？」

「ああ」

「どうでした？」

境生に止めるよう言われていたが、既に諦めていた僕は、自ら話を先にすすめた。

「今から説明するよ」

そついうと栄都はリビングに居た青葉を招き寄せ、間仕切りの扉へと僕らを促した。

「あの、あそこで説明するのですか？」

「何か問題でも」

「いえ」

いずれは行かなくてはいけないと解っていたのだけど、それでも自分の意思で、自分のタイミングで選択したかった。境生がここに居ない事が、今はなんとなく寂しかった。

いけない、弱気になってどうする。僕がやらなくてはいけないのだ。

栄都は目的地に到着するなり扉を開いた。そして白の世界の中へ。青葉が続いて境界線を越えた。そして虚ろの世界の中へ。

以前来た時とは比べ物にならない重圧を感じながら、僕はこの世界へと足を踏み入れた。

途端に立ち眩みがした。二人に悟られないように堪えながら、ゆっくりと階上を見あげると――居た。

異形だ。

何だあれは？

一体どうしてあんな姿に……

「大丈夫か？」

栄都が肩を支えた。

触るな――触るな――触るな――

「大丈夫です」

落ちつけ、これは父が僕に課したテストなんだ。

「ありがとうございます」

「フム、それでは説明するよ」

「よろしく願います」青葉が丁寧にお辞儀をしながら答えた。

「はい」イエスより短くてよい、なぜならその時の僕には、これが精一杯の発声だったのだから。

主人公

「まずご子息の検査結果ですが、特に異常はありません」

栄都は僕と青葉さんを前に、淡々と説明を始めた。

「あの、それは」

「目にも脳にも、精神にも、です」

「良かった」

青葉は胸の前で小刻みに震えていた手を、ぎゅっと握り締め、小さく吐息をもらした。

「ですので、彼の一般的には異常とされてもおかしくない行動の原因は他にあると考えられます」

「それは」

「その最も可能性の高い原因は、あなたです」

「え、私、ですか」

今度は心底驚いている様だった。落ちつく暇も無さそうだな。僕はようやく、青葉の様子を窺える程には回復していた。

「ええ。あなたは哉来君に白い上履きを履かせていたようですね。何故です」

「それは……苛めを早期発見するためです」

「ほう、早期発見」

「ええ。苛めは持ち物とかに落書きされたりする所から始まるでしょう。ですから少しでも早く見抜くために白い靴にしたんです」
「なるほど」

栄都はちつとも納得がいつてないようだった。最初から青葉の答えなど期待していなかったのごとく質問を続けた。

「では、それが逆に苛めの原因になるとは全く考えなかったのですか」

「え」

「子どもたちは自分と違うものを苛めのターゲットにしてしまう事もあるのです。皆が青い靴を履いている中でただ一人だけ白い靴。これは否応無しに目立ってしまう」

「そ、それは」

「哉来君は白い上履きを嫌ってたんですよ。気付いてましたか？」

畳み掛けるような栄都に戸惑ってばかりの青葉は、次第にその声が聞き取りにくくなっていった。

「いえ、あの」

「上履きが汚れていた事がありましたね。あれ、苛めじゃありません。彼が自分でやったんですよ」

「そんな、そんなことするはずありません」

「ならば哉来君に聞いてみると良い。証人もいます」

「嘘」

「僕が言うのもなんですけど、本当です」

僕の言がどれほど信憑性をもって捉えられるかは分からない。でも青葉が栄都に責められるほどに、僕の気分は楽になっていった。決して僕がサディスティックというわけではない。今の栄都の言葉一つ一つが、彼女から澱を剥がしているのだ。痛みを持って、僕のために。

無論、栄都が意識してやっているとは思えない。絶対にないだろう。ただそれでも、栄都と僕とは相性が良いような気がする。もしかしたら境生よりも――

繋がりが薄れれば薄いほどよい。それで奴ら、怪異は弱まってしまふ。薄まって、弱まって、縁との結び付きが断ち切れると、怪異は消える。僕の一族は怪異を視る事が出来る。特別なことではない。たんにその存在を知っているから、脳が認識してしまっているから嫌でも視えてしまふ、それだけだ。僕の一族でなくとも、一度怪異

を知ってしまった人間には、余程のことがない限り視えてしまうらしい。栄都の知らない世界、僕らだけの世界。

僕がそんな村にあつて、長を継ぐための試験を受ける事になったのは、僕のもう一つの力、そして僕だけの力によるものだ。怪異を消す力。一族で唯一、受け継がれたという力。不思議な力。僕だけの力。そう、何故ならこれは僕の物語なのだから。

接近

父が言っていたことがある。人は必ず『よくないもの』を創る、のだそう。それは時に戒めであり、時に呪であり、時にただ興奮したいたがために。信仰の対象にすら悪い面を想像することもある。何故によくない方向へと向かってしまうのか、未だに僕には分らない。結果、いわく、言い伝え、教養を孕みながらも、何故かおぞましい内容の方が、地に、文化に根付いてしまう。この土地に椿姫が根付いたように。恨み、妬み、そういった負の感情こそが人間の根幹だからだろうか。分からない……

偶然にせよ栄都は今、青葉をあるべき姿に戻そうとしている。知ってか知らずか、栄都の発言は青葉の心を矯正している。現代へと、現実へと。弱さと向きあう事は出来なくても、己の弱さ知る事が出来れば、否応無しに現実が青葉へ流れ込む。目を背けていようと、栄都の言葉は彼女の耳から入り込み、歪んだ思考を突き刺さだろう。

今の僕には階上のモノを完全に捉える事が出来る。青葉にも視えているだろうか……白の世界にありながら、はっきりと白と認知出来てしまうモノ。輪郭はやばやけているのに、とても不思議な感覚だ。人工の白とは何が違うのだろうか。

それは女のようなだった。椿姫を原型としているから当然と言えば当然だと思う。ただ人ではない。人型とは言いたくない。いずれにせよそれは次第に表情を失い、今ではただの塊のようになっていった。白い塊。青葉によって産み出された白いモノ。もうすぐだ、もうすぐ剥げ落ちる。青葉の想いと共に……

「そんな、哉来がどうして自分の靴を汚すのですか」

今は青葉と栄都の二人に任せておく方が良いと判断した僕は発言を控えた。

「彼はあなたに期待していたのです。今度こそ皆と同じ白い上履きを買ってくれるかもしれないとね。今度こそ気付いてくれるはずだと。彼はあなたにサインを送っていたのです」

「サイン」

「そうです。あなたが哉来君に白い上履きを履かせる、他人とは違う事を強要するって事は、こう言うことだと伝えたかったのでしょうね」

「……」

「ところが、あなたはそれに気付くどころか、そんな哉来君を許さなかった。あげくには担任の先生を疑ってみたり、ましてや妖怪の仕業とまで考える様になるとは。哉来君もおかしくなる訳だ。おつとすみません、これは余計な推測でしたね」

聞いていなかったのか、と疑う程の沈黙があたりに広がった頃、青葉がぼつりと言葉を落とした。

「全部、私のせい？」

彼女には悪いが僕は同情もしないし、慰めたりなんか絶対にしてない。これは必要な儀式であるし、怪異を産んだ責任は彼女でなければ取ることは出来ない。

呆けた青葉が突如、膝から崩れ落ちた。同時に階上の白いモノがぐらりと揺らぐ。先ほどより認識がむずかしくなっていた。白の世界に溶け込んだのだらう。このままいけば、いずれはただの白になるはずだ。

存在を、怪異を知らないままに、存在を薄め、宿主との繋がりを今まさに絶たんとしている栄都を、僕は素直にすごいと思った。栄都は虚構の世界、物語の世界にいるようでいて、徹底したりアリスムがある。本人は嫌がるだろうが、彼は言葉で人を殺せるかもしれない

ない。そしてそれすら当然だと言える雰囲気だ。栄都にはあった。どうやら境生は無駄足かもしれない。僕が舌を巻きながら褒め言葉を言おうか迷ってる間、栄都はさっさと帰り支度を始めていた。

「急いでいるので僕はもう帰ります。あとはご自身でどうにかしてください」

青葉は何も答えず、何も動かず、ただぼんやりとして床にへたり込んでいた。

これ以上、栄都がいると青葉を殺してしまうかもしれないと危惧しながらも、その話術、思考を学びたい欲求が僕にはあった。父が学ばせたかったこと、それが目の前にあるかもしれないという強い期待は、しかし、抜け殻のようになつた青葉を見ることで急速に萎んでいった。

「フン、何もしないのか。あなたには親の資格すらないようだ」

栄都の捨て台詞にも青葉は何も反応を示さなかった。栄都をちょっと酷いとも思ったが、もしかしたら彼なりのエールなのかもしれない。その可能性は低そうだけれども。

栄都が白の世界から玄関へと踵を向けたことで、一人残された青葉を見ているのが辛くなった僕は、階段を昇る事にした。残念ながらまだ青葉を元気付ける余裕はない。僕にはまだやるべき事があった。栄都が遣り残した最後の仕事。僕だけの仕事。

繋がりを断ち切られた怪異はほっておいてもいずれ消える。それでも僕は急いだ方が良くと思った。仮に青葉が何か行動してれば、僕も栄都和一緒に帰ったかもしれない。でも彼女はそうしなかった。それ程強くはなかった。いや、そんなに強い人間なんて居ないのかもしれない。母が子を苦しめていたと知ってしまったのだから……

大きくカーブを描く階段を折り返し、白いモノへ近づく。もう目

を凝らさないと見えなくなっていた。ようやく見つけたそれは、あと数歩先のところで蠢いていた。最早人型だった面影も、意識へ強く訴えかけてくる白色も何もない。僕は頬に伝う汗を振り払うようにして拭いさり、一段、そしてもう一段、慎重に足を動かした。

表裏一体

突如、境生の間の抜けた声が室内にこだました。

「お邪魔つしまーす」

「遅かったな。だが、もう終わったよ」

どうやら栄都と玄関で鉢合わせになったらしい。栄都の声は聞き取りにくかった。僕は足を止め、玄関へと耳を傾ける。

「ふーん。それで皆救われたのか」

「救う？ まだ君はそんな事言っているのか。呆れた奴だ」

「呆れてくれて結構。だがお前言ったよな？ 問題を先に解決した方が勝ちだって」

「フン、覚えていたか」

「ああ、いつもなら『問題を先に解いた方が』って言うはずだからな」

僕には解くと解決の違いが良くわからなかった。解く、正解を導き出す事。解決、問題を上手く処理する事、だろうか。やっぱり良くわからない。気付くと僕は足を止め、息を潜めていた。何故か二人の間に入っではいけない気がしていた。

「フン、いずれにせよ結果はおな……じ」

栄都の発言に耳を凝らしていると、一瞬の間があったあと、ドスンと鈍い音がした。

「おっ、おい栄都！ どうした？ 道明、道明、いるかつ！」

「は、はいっ！」

慌てて階段から引き返し、急いで玄関に向うと、境生が栄都を膝に抱えているところだった。一瞬、境生が栄都に何かしたのかと思っただが、どうやらそれは違っていた。栄都は身体をだらりとたらし、顔をしかめ、苦しそうに喘いでいた。呼吸が、肺から搾り出した空気の音が、不規則に響いていて、少し気分が悪くなった。

「ど、どうしたんですか、まさか他にも居たんですか！」

「ん、他？ 分からん、急に倒れた」

「そうですか、とにかく病院へ。あ、外に運転手さんが居ますよ」

「よし、そっち持つてくれ」

僕は意識を失いつつある栄都の足を持ち、境生と二人で車まで運ぼうと玄関の扉をあけた。異変を察知したのか、殆ど間をおかず、庭に停車していた白い車から、同じく白い運転手が飛び出してきた。彼は酷く慌てていたが、その動きはとても俊敏だった。

「ど、どうしたんですか？」

「分かりません。あの、僕らが車に乗せますから、とにかく急いで病院へ」

「そ、そうですね」

白い運転手は急いで自分の持ち場、運転席へと戻り、後部座席のドアを開いた。

僕と境生は迅速に、しかし慎重に栄都を後部座席に乗せた。身体を全て座席に押し込んだところで、栄都がほんの僅かに目を開いた。すぐに気付いた境生が身を乗り出し、栄都の顔を凝視した。

「よし、意識は戻ったな。大丈夫か？」

「最悪だ。どうやら借りを作ってしまったようだな」

瞼を持ち上げる事さえ困難そうな栄都だったが、声は意外と確りしていた。

「けっ、お前の存在自体が借りまくりだっつーの」

「フン、ならばこの勝負に君が勝てば、僕の名をくれてやろう」

「いきなりなんだ、話が繋がらないぞ。名？ だーれがそんなもんいるか。良いからさっさと病院行って来い」

そう言つて境生は荒々しくドアを閉め、白い運転手をお願いしなすと言い、頭を下げた。

運転手はありがとうございますとだけ言ってお辞儀も会釈もしなかったが、どうやらそれは時間が勿体無いからで、早々と車を動か

し去っていった。去っていく車を見つめる境生は、どこか寂しげだった。

「栄都さん、大丈夫ですかね？」

栄都を乗せた車が去ったあとと暫く境生の指示を待ってみたが、何のアクションも無かったので僕から聞いてみる事にした。

「多分な……」

「先生が言っていた栄都さんがちよつと変つてのは『解決』の事だったんですね」

「ああ」

反応が鈍い。

「でも『解く』と『解決』ってそんなに違いますかね？」

「あいつが過程専門でおれが結果専門」

「ああ、なるほど」

境生は未だにぼんやりとしていた。きっとショックだったのだろう。僕はこの二人にどこか深い繋がりがあるように感じていた。

表と裏、だが併せて一つになるような感覚だ。上手く嵌っている。嵌りすぎている。この先も僕の隙間は見つからないだろう。

「じゃあ、結果の方を出しに行かないと」

「そう……だな、よし」

僕はようやく立ち直った境生に、栄都が青葉邸で行った事の解説と青葉の状態を簡単に説明し、再び青葉宅に戻った。

この扉を開けるのは今度こそこれが最後だ。そう思い、重厚かつ静かなドアを開け、そして再び立ち眩んだ。

漫食

「おいおい、お前まで倒れるなよ」

境生に脇を抱えられながら、頭を軽く振ると、眩暈は落ち着いた。
「はは、すみません。緊張と解放が交互に来たから、少し疲れただけですよ」

「緊張ねえ。あいつの解説聞いてると疲れるだろ」

「ですね。僕なんて何も言えずに、青葉さんの傍で凍ってましたよ」
勿論直接的な理由は違うけれど、あの白いモノが関係なかったとしても、おそらく何も言えず、青葉さんのフォローも出来ずにいただろうと思う。つけ入る隙もないし、つけ込む気概もない。

「青葉さんはリビングにいますか？」

「いえ、あそこに居ると思います」

「え、あの白く塗られたところ？」

「はい」

「ふーん」

たいして気にする様子もなく、境生は奥へと進んだので、僕も大人しくついていった。境生の背中が少し大きく見えた。

「やっぱり先生がいるとなんか安心だな」

「え、何？」

「いえ、なんでもありません」

「ふーん、お、居た居た」

境生の視線の先で、青葉はうずくまったままだった。それでもどこか先刻と様子が違うと思い、良く目を凝らしてみると、青葉は化粧を直しているようだった。コンパクトだろうか。しきりに顔の前で手を動かしている。不思議に思いながらも僕は立ち止まって、化粧が終わるのを待つ事にした。

「泣き顔見られたくないんですかね？」

「化粧なんてしなくても充分綺麗なのにな」

「コブつきですよ」

「ばっか、そんなじゃねえよ」

「怪しいなあ」

僕としてはロリコンといわれた事に対する精一杯の仕返しだった。
「うっせ」

やはり境生と一緒にだとリラックス出来る。父が最終テストとして境生の元に僕を送り込んだのは、やはり正解だったのか。それとも境生と栄都、二人いることが肝心なのだろうか。この二人はセットのようなものだし。一通り思いを巡らせた後、思い出して青葉の様子を窺うと、相変わらず化粧をしているようだった。我慢出来ず声をかけようとしたら、堪えきれなくなったのか、境生が先に呼びかけた。

「青葉さーん」

どうやら出来るだけ明るく振舞うつもりらしい。

「あ、お、ばさーん」

それでも彼女から返事はなかった。栄都に言われた事がそれほどショックだったのだろうか。それとも息子を追いつめてしまった自分を責めているのだろうか。無言を保つ青葉に境生が近づき、そつと肩に手を置いた。

振り向いた青葉の顔は――白に染まっていた。

復活

「おい、青葉さん確りしろ！」

境生が青葉の前に廻りこみ、青葉を大きく揺らした。

不味い！ 不味い！ 不味い！

どこだ？ どこに居る？

「くそつ、さつきさつさと倒しておくべきだった」

まだ彼女と白いモノの縁が切れていないのか。いや、寧ろ深まっているのか。何故——だが今、縁が切れているのかいないのかを考えている余裕はない。僕が消さなくては！

目を凝らして辺りを見渡すと、すぐ近くにそれは居た。そう、手を伸ばせば届きそうな程に近く。

「くそ、降りてきたのか」

その身体の殆どを人工的な白色と同調させた白いモノは、その歯牙を今再び青葉へと伸ばそうとしていた。境生に揺られ、力なく崩れそうになる青葉のすぐ傍まで近寄り、ぐうぐうと蠢いている。もう一刻の猶予もなかった。妄想が、怪異が現実となってしまう。

「先生！ 倒しますっ！」

「駄目だ、まだ早いっ！」

「ですが」

早いも糞もない。これ以上待っていたら、また青葉と結びついてしまう。もし再び繋がってしまったら、それはもう僕の手にも負えない気がした。強く、そして深く結びついた縁は僕にも消せない。怪異が確立してしまう。この現代においてそれは必要ない。早く薄めなくては、断ち切らなくては。

だが栄都はもうこの場所にいない。薄める役者が居なければ、残されたのは退治役の僕だけだ。出来るはずだ。いや、やらなくては。

僕は自分を鼓舞した。拳を強く握った。僕は境生を無視し、白いモノへと突っ込んでいった。右手の痣が焼ける様に熱い。

これは――

激しい衝撃を感じた。

どこを向いているのか分からないが、床に立っていない事だけは分かった。浮いている。動いている。目印がない。怖い。

次の瞬間、身体が何かに固定された。何だ、どうしたのだ？

「道明っ、大丈夫か道明っ！」

何か聞こえる。そうだ、答えなくては。声を出さなくては。息をしなくては。

「大丈夫かつ、おいつ、道明っ！」

「は……ひっ……」

男の腕が見えた。境生の腕だ。

ようやくおぼろげながら状況を理解する事が出来た。

「良いか、動くな、暴れるな、騒ぐな、良いか？」

僕は何度も首を縦に動かした。本当に首が思い通りに動いているのか自信は無かったけれど、どうやらちゃんと動いている様だった。

「よし、そのまま手をゆっくりと伸ばせ」

境生に言われる通り僕はゆっくりと腕を伸ばす。

「そうだ、今手に何か触れているのが分かるな？」

僕は何度も頷く。

「よし、それが床だ、下だ。大地、分かるな？」

「は、はいっ」

「じゃあ足を置くからじつとしてろよ」

「は、はいっ」

どうやら僕は逆さになっているらしい。

床に横向けに寝かされた僕は、ようやく状況を完全に理解した。身体の設定面積が、そのまま安心感に繋がった。

情けない。重力が、身体にかかる圧力が心地よかった。

何が村一番の能力者だ……。自責の念はそのまま境生への信頼へと繋がった。境生が頼もしかった。

境生は僕の前に背を向けてしゃがみこみ、僕を守る様に注意深く周囲を窺っていた。

その隙間には青葉の顔が見える。今は彼女も化粧を止め、呆けた顔でこちらを見ていた。

「先生、もう大丈夫です」

僕が立ち上がるうとする、境生は再び辺りを見渡し僕の顔を見たあと、良しと言って僕の手を引っ張った。

そうだ、奴はどこに行った？ 蠢く気配を目で追う。階段だ。

白いモノは、二階へと戻ろうとしているようだった。その歩みは遅い。

「見つけたか？」

「ええ、階段に居ます。殆ど動いてませんけど」

「良し、青葉さん、青葉さんっ！」

「え……あ、は、はい」

どうやら青葉は正気を取り戻した様だった。僕は白いモノを倒すには至らなかったけれど、弱める事が出来たのかもしれない。それとまた僕らの一連の騒動が彼女を現実へと引き戻したただけなのか。その時の僕は少し弱気になっていた。

境生は階段の方を睨みつけながら「今のうちにこちらへ」と、青葉を呼んだ。

青葉は四つん這いになりながらも、ちゃんとこちらへと近づいてきた。

まだ油断は出来なかったが、少し奴から離れたことで幾分僕は落ちつきだしていた。

白いモノ、境生、僕、そして青葉が一直線に並ぶ。目の前の境生

の背中が大きく見えた。

「だから早いと言うのに」

「すいません」僕は境生の背中に謝った。

「まあ良い。青葉さんも正気に戻ったようだしな」

「すいません」今度は青葉が僕の背中に謝った。

「青葉さん、僕らが居ない間に一体何があったんですか？」

「分かりません、私」

「落ちついていいですよ」

「私、私が……私が原因……私のせい……」

青葉の混乱した思考に惹かれるように白いモノが反応した。動くうとしている。こちらに近づこうとしている。僕がいない間に、何が起こったのか想像できた。きつと彼女が引き寄せたのだ。彼女は再び願ってしまったのだ。自分の息子を白く塗る自分を信じられずに。そして正当化するために……。

「先生、不味いです！」

「私……私が全ての原因……」

「違います！ 違いますよ、全然、全く！」

境生が振り向いて叫んだ。瞳が真摯の光で溢れていた。はじめて見る顔だった。

その光に反応してか僅かに青葉が動く。境生の一言一言に身体を痙攣させていた。まだ青葉には境生の声が届いているようだった。

間に合うか、と思ったが僕は考えを改めた。待て待て待て待て。

今の彼女と奴は結ばれていないのだ、結ばれようとしているだけで。ならば今、彼女を説得したところで無駄だ。既に栄都が立ち切っている。そう、そのはずだ。なのに何故奴は力を増している。何故僕に倒せなかった？ 僕の疑問をよそに、境生はゆっくりと噛み砕くように青葉に語りかけていた。

「全ては妖怪の仕業です、貴方は悪くない」

「……私、本当は知っていたのです。自分の過ちに気付いていたのです……私、親失格です……」

止まった。青葉が言葉を取り戻すと奴の動きも止まった。合ってるのか、これで。

「先生、止まりましたよっ」

「よし！」

境生が青葉を説得すれば奴の動きが止まる。今はその事実を受け入れる。その間に僕は考えなくては。奴を倒す方法を。しかし倒せるのか？ 不安が胸を支配する。とにかく今は時間が欲しかった。

僕は奴を正面に据えるため、ゆっくりと境生の前に移動した。

「先生、僕が見張ってますからその間に青葉さんを」

「よし、頼んだぞ」

境生は僕と奴に背を向け、項垂れている青葉の真正面に右膝をつくと、彼女に向かって静かに問いかけた。その声は慈愛に満ち、相手を慈しむ、そんな安らぎに満ちた響きを持っていた。

捏造

「椿姫をご存知だそうですね」

優しい声だった。柔らかな日差しの中で、そう、緑溢れる公園が良い。僕は本を片手に彼の話を聴くのだ。

だが今の状況はそんな願望さえ空虚なものにする。妄想は所詮妄想だと言う現実を突き付ける。

「彼女が自分の子どもの血で染めた着物を着ようとした件もご存知ですか」

青葉は小さく頷いた。

「では、何故彼女がそのような事をしようとしたかは知っていますか」

「それは……知りません」

「彼女は自分の子供を愛していたのです」

青葉は困った様に頭を擡げた。僕が青葉なら同じくそうしただろう。そんな事は聞いた事が無いし、文献にも載っていない。椿姫は子供の血で着物を染めようとしたはずだ。だいいち、今更椿姫を説明したところでもう遅い。いわくをゆがめる事で、一体何の効果があるのか。彼女は既に憑りつかれた後だし、もつと言えば、既に縁も切れている。そんな僕の危惧をよそに境生は続けた。

「この家には妖怪が居ます」

「……椿姫ですか？ でもそれは関係のない事です。全ての原因は私にあるのですから」

「いえ、ここに居る妖怪は椿姫ではありません。いや、そもそも椿姫は妖怪ではない」

それは確かにそうだった。しかし、椿姫が妖怪かどうかなど関係無い。怪異にとっては『いわく』こそが大事なのだ。妖怪、言い伝え、昔話、いや都市伝説だって怪異の元へとなり得る。想いの力こそが糧なのだ。キツカケなど何だってかまわない。

「妖怪は名と姿が与えられてこそ妖怪たりえます。だが椿姫は妖怪として語られていたではありません」

「目的？」

「ええ、椿姫の言い伝えに登場する人物はどれも全てれっきとした人間です」

「はあ……」

「かといって人間の怨念、幽霊の話でもない。別にうらめしやゝなんてエピソードはありませんからね」

「確かにそれはそうですね。それではただ単に惨い仕打ちをした人の話、でしょうか」

「逆です。全くの逆。椿姫に隠された目的、それは『母と子の愛』です」

「母と子の愛……」

「そうですね。彼女は妾に殺されそうになった我が子を守ったのです。まあ良くある後継者争いですね。妾を殺したのは事実ですが、それは白鉛を塗るなどの生温い手段ではない。小柄を手——それこそ必死だったと思います」

この人は一体——僕は境生が何を言おうとしているのか理解できずにいた。青葉も同じだったと思う。ただこの緊迫した状況の中で集中していたのか、境生の話は驚くほど耳に入ってきた。

「もちろん彼女は自分が処罰される事も承知してました。しかしそれでも我が子を守りたかった。愛していた。そう、今のあなたの様に」

「そう、のですか……ですが先生、私は……」

「まあ、最後まで聞いてみてください。お嫌ですか？」

「いえ……ただ申し訳無いと……」

「それは気にする事ありません。僕は聞いて欲しいのです」

「……分かりました」

「ありがとうございます。それでは……この地はそう、元々は『白塗り』という妖怪のテリトリーだった。人を白く塗る妖怪です。椿

姫ではありません。先ほども言ったように椿姫は妖怪ではないですからね。ただの人だ。一方、妖怪、彼らは語り継がれる事でその役目を果たしてきました。白塗りの場合は単純です。白く塗る、いや塗られるのには注意しろ、つまり白鉛の毒から身を守れという示唆がその役目ですね。何故直接的な言い方をせず妖怪などとぼやかしたのか。それは簡単です。当時、白鉛は高貴な身分でなければ使用することなど無かった。高価でしたからね。さて高貴な身分な方たちが白鉛を悪用するでしょうか。答えはイエスです。残念ながら人の子である以上、悪いことを考える輩もいたようです。だが、それを認めるわけにはいきません。何故なら自分たちが高貴であると思っているからです。高貴ということは、浅ましい行為とは無縁でなければならなかったからです。だから白塗りという妖怪を創り、下劣な行為に当て嵌めた。自分たちが浅ましい行為をしているのではない、これは妖怪の仕業なのだ、とね」

ここまで一気にしゃべると境生はふと一息ついた。僕には境生の言っていることが何となく理解できたが、青葉に理解できているかは疑問だった。

「また別の説もあります。白鉛の毒性は弱く、長年使用してようやく死に至る程度でした。だから逆に、普通の人、つまり一般庶民です、高価な化粧品に縁のなかった庶民には、その毒性が判然としなかった。庶民にも使用人などを通して高貴な人たちの生活が漏れ聴こえるものです。特にこの時代はね。そして巷間には、化粧をすれば、つまりは贅沢をしている人ほど、何故か弱っていくという事象が広まった。これは庶民にとっては矛盾ですよ。何故贅沢をしているのに、ってね。結果、良く分からない現象として認知されてしまったのです。白鉛は怪しいけれど確証は無いってところでしょうか。その曖昧さの隙間に生まれたのが白塗り、という説です」

「白塗り……」

「そうです。僕はどちらかが正解、というよりも両方が原因であっても全く不思議ではないと思っています。いずれにせよこの地に白

塗りという妖怪はゆつくりと、しかしながら深く根付いた。これは間違いなさそうです。そんなところに椿姫が誕生します。勿論、普通の、人間の椿姫です。やがて彼女は成長し、そして死を迎えます。人間ですからね。普通に死にます。ただ生前、彼女は息子を身体を張って守った事があり、死後、母子愛の代表として語り継がれるようになります。これは美談としてかなり一瞬にして広まった様ですね。おそらく当時、そういった話が求められていた環境にあったのでしょう。腕の良い講師が居た可能性もあります。ただ、どういった話で語られたのか、残念ながらその内容までは今となっては分かりません。いえ、分からないようにした人達が居た、と言い換えましょう」

「誰かが母子愛を伝えないようにした？」

「そうです」

「母子愛を伝えてはいけない理由……私には思いつきません」

「そんなに難しいことはありません。母子愛というより、美談を伝えてはいけなかったのです。当時、この土地をおさめていた豪族、畠山小連にとって変わろうと、周辺の幾つかの豪族達の間で泥臭い争いが起こってます。そんな時に椿姫の美談が広まれば、これは周囲の豪族にとってはありがたい話です。民衆の反発は避けられませんからね。また、椿という花は魔除けの効果があると言われていた。ちなみに首が落ちるなどといういわれば近代からです。この美談に加え魔除けとまで言われると、畠山氏の後釜を狙う豪族達はどうにかしてこの話を揉み消さなくてはいいけない。そこで彼らは話の解体、そして再構築を行った。椿姫の行為から理由をそぎ落とし、現象、つまり殺しという枠だけを取り出し、別の理由、自分たちに都合の良い理由をはめ込んだ。息子を殺そうとたくらんでいた妾から息子を守った行為は、実は椿姫が誰かを殺したかった、そしてたまたま妾が近くにいたので殺した、と言い換えられ、椿の紅は妾の返り血、更には息子の血へと変換されました。椿姫の行為も、名前も全て貶めようとしたのです」

「ひどい……」

「ええ、ひどい話ですが効果は絶大でした。民衆たちにとってそのような悪魔、いえこの時代ですから妖怪、のような人間たちに治められるより、新しい豪族たちのほうがまだマシだと思わせる事が出来たのです。だが、それを面白くないと思う第三者がいたのです」

「第三者……」

「そうです。ようやく本家本元の妖怪、白塗りのご登場です。怪異としての地位を確立してた白塗りにとって、椿姫という新たな脅威の存在は一大事だったのですね。まあ簡単に椿姫にとってかわられ、ましてや消えてしまいうるくらいですから、白塗りの方も元々大した影響力を持っていたとは言えないでしょう。それでもやはり白塗りとしては面白くない。この頃、既に白塗りは人格を持っていたのですね。人格を持つというのはつまり、それを信仰していた人が居たと言う事です。そこで信者達は考えた。このままだと白塗りは消えてしまう、どうすれば白塗りを生かせるか。僕は別に彼らの考えが悪い事だとは思いません。妖怪とは元々、目的によって新たに生み出されたり、変容したりしなくてはならなかったのです。生物と同じですね。種を増やし進化を遂げながら生き長らえてきた。だから白塗りに変化が必要だと考える人がいた事は当然です。ただ——そう、ただ彼らが取った手段には疑問を覚えます。彼らは椿姫の行為の曖昧さに目をつけた。行為の理由がぼやけていると感じたのですね。もしかしたら言い換えられてるのではないか、とねならば今なら乗っ取れる、そう思ったのかもしれませんが。それはゆっくりと実行に移されます。椿姫は単に殺しをしたくて近くに居た妾を殺した、という枠に『白鉛を使って殺した、白鉛を塗りたかった』という意味を付け足します。元々が作り変えられ曖昧だった話ですから、これはすんなりと溶け込んでしまいました。結果として椿姫は、殺しという行為が好きで、そのために白鉛を使い、妾たちを惨殺していったという形で完成してしまいます。美談が貶められ、終いには怪異へと作り変えられた。それが今から九百年前、鎌倉時

代のことです」

「え、ですが椿姫は千三百年前だと……」

「そこです。白塗りが誕生したのはおよそ千三百年前。ところが椿姫の誕生は九百年前。これはつまり白塗りが椿姫に歴史をそっくり与えた事になります。白塗りは名前、つまり粹ですね、それすらも消し去り、そして中身だけを確りと椿姫へ溶けこませたのです。これは人を妖怪へと変える行為に他なりません。僕が疑問なのはここなのです。そう、これを果たして進化といっていいものか——いずれにせよそうする事で中身、白鉛に対する畏怖は世俗に残りましたし、椿姫の話自体が現代まで語り継がれているのもご存知の通りです」

青葉は沈黙したまま何かを考えていたが、僕には彼女が何を考えているのか手に取るように分かる。

「あなたは妖怪に憑りつかれていただけなのです。哉来くんを愛していたせいで。それは親として当然であり、貴方に非はありません」

「先生！」

僕は焦れていた。奴、白塗りが力を増している。近づいてきている。それはつまり、青葉が境生の話を信じだしたと言う事だ。このままではまた青葉と結びついてしまう。深く結びついてしまう。このままでは――

「青葉さん、白塗りは椿姫に隠れています！ あなたは確かに椿姫という妖を呼んでしまった！ だが――」

そうか、そう言う事が――

「哉来君を白くさせているのは白塗りであって、椿姫では無い！」
止まった――

「あなたが呼んでしまったのは椿姫です。子を愛するだけの一人の強い女性だ。そう、哉来君が一度でもあなたに白を強制されたと言いましたか？」

白塗りは緩やかに変体していく。

「それは……。でも、きつとあの子が言い出せない雰囲気を私が作っていたんです。だからあんな事までして私に伝えようと……」

「いくら白塗りという妖怪に中身を奪われようと、椿姫の子供に対する愛は変わりません。つまり、白塗りという妖怪の本質は、実は親の愛なのです」

今、白塗りは更なる変容を遂げようとしていた。かつて椿姫の中身が白塗りに入れ替わったように。境生と青葉によつて、白塗りという名を与えられ、椿姫という形を得ようとしていた。いわくが、世界が、今再び表裏を逆にする。

覚悟

力は衰えていない。再び、いや新たに求められた事で寧ろ上がったのか……。だが、むかつくような邪悪さ、じりじりと迫る圧迫感、それらは落ちついたように感じる。

今はそれで良い。少なくとも椿姫であれば止められる。もう少しだ。僕は境生と青葉を背後にし、少しずつ呼吸を整えた。その時のために。

「信じてもらえませんか……」

もう少しで。

「哉来君！」

突如、境生の声が背中に当る。

哉来、居るのか？

「哉来君、そこに居るのだろうか？ お母さん、もう白い上履きじゃなくても良いって言うてるけど、君は普通の上履きに戻すかい？」

椿姫へと変容を遂げる白塗りの奥、階段の影に何か——見えな
い。僕には彼がよく見えなかった。

「ああ、哉来君、君は……」

砂漠の中で、宇宙の片隅で……唯一の目印を失った旅人は何を思うだろう。

「白以外には戻さないよ。僕はようやく完全になったんだ」

「イヤアアアッ」

届かない、彼にはもう届かない。

「哉来君っ！ その目は……」

無駄だ、もう無駄なんだ。彼はもう連れていかれてしまった、渡らされてしまった。

眼球を白に染めた彼の目には一体何がうつるというのだ。光りを遮断し、闇の世界に行った彼に何が聞こえるというのだ。

「哉来っ！」

五月蠅い、五月蠅い！　どこからか聞こえる雑音がやけに煩わしかった。

「そんな、どうして！　私がそこまで追い詰めてしまったの！　哉来！」

「落ちつくんだ、青葉さん！」

誰かの腕が、僕の横で蠢く物体に重なった。

白く細い……足——人の足——そう、人の足だ。

境生が僕の横をすり抜けて哉来に近づこうとした青葉の足を掴んだのだ。

はだけたスカートから青葉の足が覗く。白くて、細い——艶かしい足。

「せ、先生！」

生きている。僕らは人なのだ。青葉も僕も先生も、そして哉来も。

「青葉さん！　あれは全ては妖怪の仕業です！」

「哉来、哉来、哉来っ！」

境生が青葉に引き摺られる。

僕は青葉の正面にまわりこみ、体全体で彼女を抑えつけた。

狂気が彼女を支配していた。彼女の細い体のどこにこんな力が……

……。今は哉来も椿姫も構っていらなかった。椿姫——

「青葉さん！　あれを退治すればすぐに元に戻ります！」

叫びが、言葉が青葉の心を捉えた。

「や……くる……」

境生が最後の楔を打つ。

「退治さえすれば、哉来君は元にもどるのです。あなたのせいではない。そう——全ては妖怪のしわざなのです」

信じてもらえますかと聞いた境生に、青葉は泣きながら従った。

「信じます、信じます！　だから哉来を……」

繋がった、のだらう。青葉と椿姫は完全に結ばれつつあった。

「後はわれらにお任せください！」

力強く言った境生の横で、僕も一つの覚悟を決めた。

痣が灼ける。椿姫は倒せない、少なくとも僕には無理だ。だけど

決意が僕の焦点を椿姫に合わせる。

僕の黒い瞳にうつった椿姫は——完全に白塗りだった。

消失

「何故だ……」

僕は青葉を見る。

「先生！ あれは、椿姫は……」

青葉の心が見たい。考えを知りたい。その奥底にある真実を知りたい。

「どう見ても椿姫なんかじゃありません！」

肢体と呼ぶべき物はある。そして顔、苦悶に歪む顔。それらがどろどろに溶合い、混り合っている。

そして、ぼたりと欠片が落ちた。

「無駄なんだよ、哉来君」

境生の目は僕には向わずに、哉来だけを捉えていた。

「無駄なんかじゃないよ」

哉来の白い世界に小さな影が出来る。彼は、笑っているのか……

そして僕はようやく知った。

椿姫には、白塗りには、宿主が二人居た事を――

そして僕はようやく気付いた。

椿姫を、白塗りを、奴を倒す方法を――

今の僕には父を信じる事が出来る。父が選び出した境生を信じる事が出来る。境生に全てを任せる事が出来る。

「哉来君、君がいくら他人と違うところ、白であってはならないところを白に塗っても、全ては無駄なんだよ」

境生の言葉に、哉来の影が消える。

「雅ちゃんを家に呼んだとき、君は『よくわからない』と言われたそうだね」

「……そうだよ。彼女は白が好きなんだ。だけど、ただ白いだけじ

やダメなのさ」

「人とは違う部分が白くないといけないんだろう?」

「へー、よく知ってるね。そ、白い靴、白い肌、白い部屋……。でも、それじゃ足りなかった」

「ま、まさか、それで目を?」

哉来の瞳が僕を捉えた、ように感じる。

「そうだよ。僕は知ってたんだ。ただ勇気がなかった」

「契機は栄都か」

「そう! あの人は僕に街を呉れると言った。僕が王様だよ? 完全じゃないとね。これで、これできっと彼女も気に入ってくれる」

「それは誤解だな」

「誤解?」

「ああ、君は知らない様だが、彼女、雅ちゃんは目が悪いんだ」

そう、なのだ。つまり――

「……何それ?」

「つまり、薄い色は全て白にしか見えない。雅ちゃんはそういう病気なんだ」

僕は雅を想い、哉来を想った。それはとても悲しい作業だった。

雅は産まれながらに白の世界に居たのだ。

「……そう……なの。でもだから何?」

「そう、だから白い部屋に白い君がいたら……見えないんだよ。彼女にはね」

「え?」

そして哉来は白の世界を構築した。だから――

「だから彼女の目には白しか写らない。白しか好きになる事が出来なかったんだ」

だから、哉来は彼女の世界から消えてしまった。

対決

今は哉来を見なくなかった。見えない事に感謝した。僕にはこれ以上何も言う事が出来なかった。

「そんな……。でも、部屋から出れば……」

「同じだよ。のっぺら坊になった君が見えるだけさ」

境生は悲しそうな声を出していた。

「それに彼女の目はもうすぐ治る。そしたら白以外のものも好きになるかもしれない」

「そんな……。だったら僕はどうやって彼女に気に入られたら……」
境生が哉来へ近づく。

「男はここ、ハートで勝負だ！」

「そんなの無理だよ……」

「どうして？」

「だってお母さんが心配してるの知っていてこんな事やっていたんだもの……」

「それは君のせいじゃない。全て妖怪の仕業だ」

「……」

「白塗りは白に塗る事だけが目的の妖怪なのさ。そのためなら何でもする。君が自分を塗った、いやおそらく君に彼女の事を勘違いさせたのも——こいつのせいだ！」

境生が指し示した先には、ただ白い空間が広がっていた。

奴が動いている。

向う先は青葉か、哉来か——いずれにせよ止める、僕が止めてみせる。それは僕にしか出来ない事なのだから。他でもない、僕に課せられた試練なのだから——

一步、一步近づいただけで痣が熱く、熱く反応する。だけど僕は気にしなかった。例えば腕が爛れようととも気になどしていられなかつ

た。

「哉来君！ 僕らを信じるんだ！」早く――

「で、でも……彼女と会う前から僕はこんな事をしてしまつて……、今更……」

「君に憑り付く前はお母さんに憑り付いていたんだ。青葉さんの君に対する愛情が椿姫を呼び、椿姫に隠れていた白塗りが君に憑り付いた。だから君は悪くない！」

今では触れる事が可能なほどに哉来に近づいた境生の声は、哉来を、そして僕を励ましている様に聞こえた。

「私が悪いのっ！」

そして、青葉をも。

「ごめんなさい、哉来……、先生は愛情と仰ってくれたけど、きつとそれは違う。私のあさましい心が椿姫を呼んだのよ！ だからっ、だからあなたは悪くないわ！」

「お母さん……」

「哉来君、お兄さんの勘では彼女、君のこと結構気に入ってるぜ！」

「え、嘘？」

「ああ。後はこの妖怪を退治すれば大丈夫。君には何の責任もない。お兄さんの言つた事を信じてくれるかい？」

哉来の心に合わせ、新たな繋がりを得た事で、目の前の椿姫であり白塗りである妖が力を増していく。

既に僕には止める、いや近づく事すら困難だった。

だからもう、これ以上は――

「僕、信じるよ！」

零れ落ちた涙が、白を、穢れを払う。そう、彼は白の世界になど居るべきではないのだ。

「よし！哉来君！」

「青葉さん！」

僕と境生の声が重なり、視線が繋がる。

良い気持ちだ。きつと、そうきつと、悪くない。

「君はこれから自分を白く塗り続けるかい？」

「あなたはこれから哉来君に白を与え続けますか？」

「もうしない！」

「もうしません！」

いつだって人間の絆は強かった。それが歴史であり、事実なのだ。妖怪と人の繋がりがなんて脆く儚い。

僕は繋がりを完全に断ち切られた憐れな妖の前に立ち塞がり、そしてゆっくりと手を伸ばした。

「道明！」

「今度こそまかせてください！」

いつだったか父が言っていた。無色と言うのは、何も無いのではなく実は七つの光がバランス良く交じり合った最高の状態であると

——だから、僕は吠えた。消えた痣が僕に勇気をくれた。妖の体内で僕は精一杯の大声をはり上げた。

解決

意識を失っていたのか、抱き止められた感触に気付き、僕は目を開けた。すぐ目の前に心配そうに覗き込む境生の顔があった。これで二回目だ。僕はすぐに起き上がろうかと思ったが、やっぱり少しだけこのままでいようと思った。

「お、おい大丈夫か？」

「……」

問題はない。白塗りは完全に倒した。焼け付く手がそれを物語っている。それでも僕は優秀なのだ。

それでも僕は自分の足で立つ事はしなかった。僕が境生のもとにきた理由、役目を果たせた事に満足していた。余韻にただ、もう暫く浸っていたかった。

だらりと下げた自分の手を見やると、そこには痣が戻っていた。

痣が消えたのは初めてだったが、どうやら一時的なものらしい。手から視線を戻すと境生が僕をじっと見つめていた。

「な、何ですか？ 顔、近いですよ」

「ん、ああ、すまん」

「もう大丈夫です。立ってます」

「よし」

境生は難儀そうに僕を床に下ろし、いつの間にか抱きしめ合っている青葉と哉来に向き直った。

僕は自分で思った以上に気を失っていた事に気付き、その事がちよつと恥かしかった。

「それではこいつも気が付きましたし、僕らはこれで失礼しようかと思います」

「そんな、もう、ですか？」

「ええ、今はお二人の時間を大切にして欲しいですし」

僕としては何だか慌しい気がしたが、おそらく僕が気を失ってい

る間に境生が必要な事はしゃべっただろうし、これでなかなか人の気持ちに分かる人だし、この人が帰るというならもう大丈夫だろうと思った。

「道明、忘れ物ないかー？」

「あ、はい、大丈夫です」

「よしっ、じゃあ青葉さん、哉来くん、元気だな」

「はい、ありがとうございます」

「おじちゃん、ありがとう！」

境生にむけて放った哉来の声が意外に子どもっぽくて、僕は少し驚いた。なんといつても彼はまだ小学生なのだ。

「お兄ちゃん、な」

「えー、だって」

「雅ちゃんはお兄ちゃんって言うてくれたぞ」
多分嘘だ。

「じゃあお兄ちゃん達、ありがとう」

僕を含める事で、哉来は哉来なりに決着をつけたのだろうと思う。彼は大人だった。

「お二人とも、この度は本当にありがとうございました」

「いえいえ、もしまた何かありましたらあのバカ栄都ではなく、我が日本一妖怪退治事務所にご相談下さい」

苦笑いでも良いか、初めて見た青葉の本当の笑顔はとても美しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4234x/>

願い

2011年11月14日03時21分発行